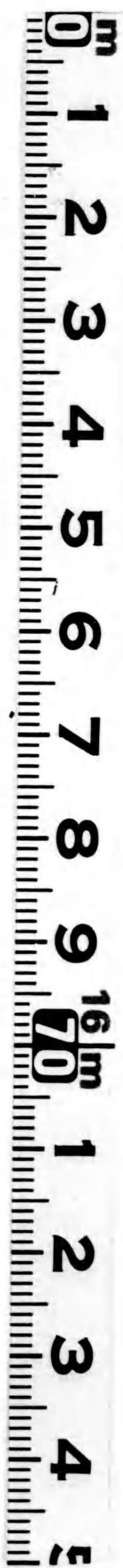


連鎖
小説



特



始



連鎖
小説

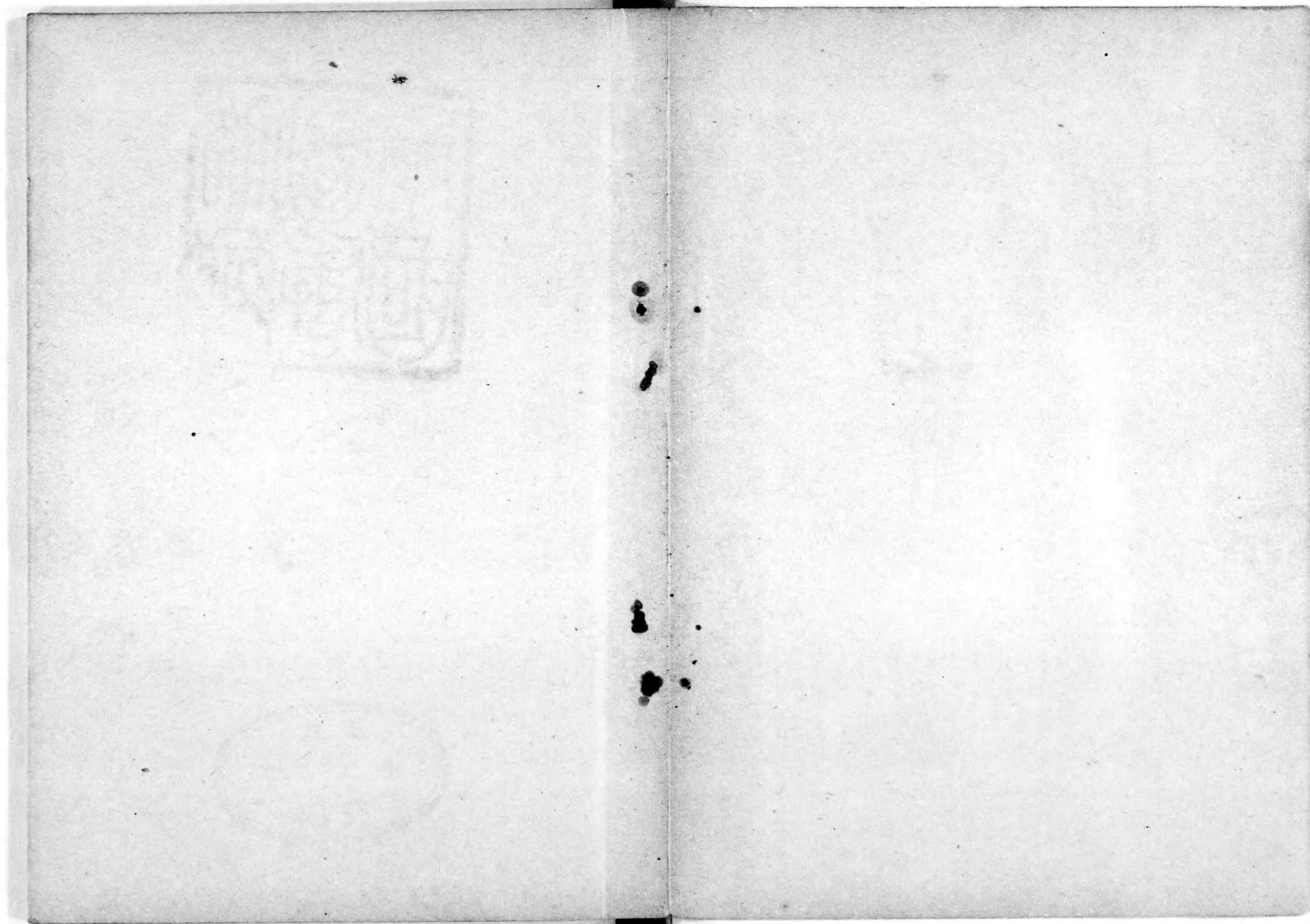
女の心



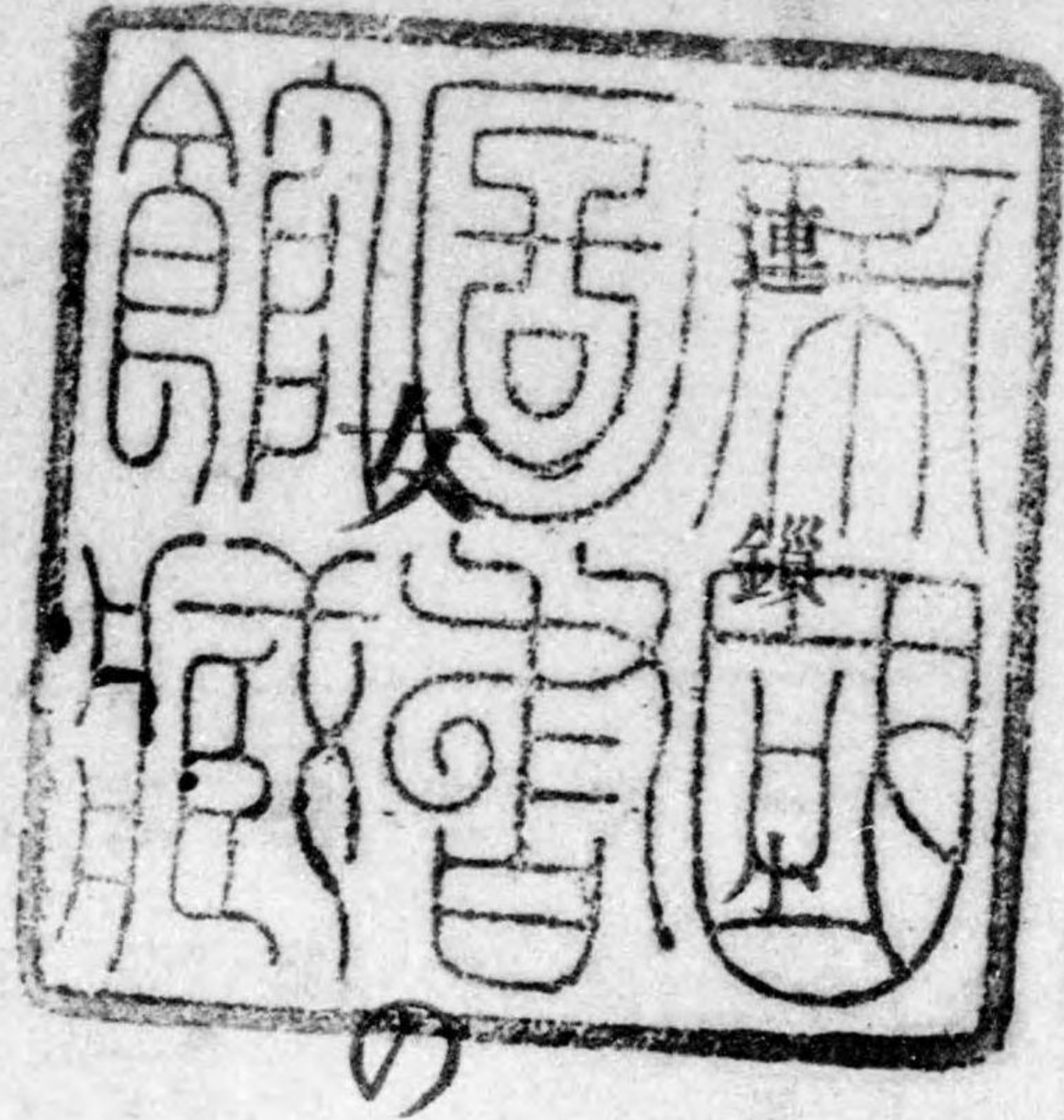
磯千鳥作



特



持100
586



の
說

磯 心

千

鳥

著

大正
6. 6. 4
内交



目次

一 老母の心
二 女二人
三 決心
四 誰の罪
五 母一人の子
六 悲しき家

七 うたがひ
八 わなき
九 疑ひの家
一〇 つきぬ縁
一一 おどろき
一二 なまきわらひ



女の心

磯千鳥著

一 老母の心

落魄に落魄を重ねた小説家
小栗一雄の母、お淺と、五年
前、一雄との戀に破れた明石
春子とは、今しがた、上野山
下の、或料理店の鬮を跨いで



つれだち乍ら、公園竹の臺の新緑の木の下を、ぶら／＼と根岸の方へ歩いて行く。

その見すばらしい風彩をしたお淺と、飽くまでも華美を粧つた春子との對象が極めて奇妙で、通り過ぐる人々は必ず一寸振り返つて、二人の様子に餘計な心配をされると云ふ具合である。

「突然路傍で御會申しました時に、昔のお友達だと仰有つたので、もう只お懐しく存じまして、ほゝゝ、勿體ないお話でございますが、まあ貴女のやうな御方が一雄の嫁でございましたら、どんなに私も嬉しく、心強からうと思ふのでございますよ、ほゝゝ」と云ふのはお淺である。

春子は無造作に、

「思ひがけなく、途中で御會申しまして、詰らない處へ御誘ひしましたが却つて御迷惑でございましたのでせうね」

云ふのをお淺は、あはて、

打ち消し乍ら、

「どうぞ致しまして、どうぞ致しまして、とんでもない事でございますよ、お蔭様で、結構な



保養が出来ました」

「お母さん、あんなことを仰有つては……」

「いゝえ、どう致しまして。一雄が年中いくちのない暮しを立て、居りますので、此の年老の私にさへ、芝居の一つ、活動の一つも見せることが出来ないのでございますよ。まあ、何年振りか、それも貴女の御親切でいゝ保養を致しましたよ。どうも御禮の申し様もございませんで、はい」

「あらまあ、お母さん、そんな御禮など、仰有らなくつてもようございますわ。妾一雄さんの御友達だったので、でもね、お母さんが樂に御芝居の一つも見なされることの出来ませんのは



それは一雄さんの罪ではないと思ひますわ」

「いえ。一雄としましたら、からもう意氣地がないので、始終貧乏ばかり致して居るのでございますよ。御恥かしいわけでございます。それに、あの嫁も一雄そつくりの性質で、ほんとうにねえ、困るのでございますよ」

とお淺がこぼすのを受けて、

「左様でせうとも、左様でせうとも、一雄さんには何の罪もないのでございますよ。小説家と云ふものは、只一生懸命に書いてさへ居れば、それで義務はつくせるものでございますが、小夜子さんまで、一雄さん同様の氣になつてゐては、お母さんの御困りになるのも、御心配なされるのも無理はありませんわ。小説家の盛衰は、只妻の内助にあるものでございますから、妻の不心得な家は何時までも繁昌はしませんのですわ。一雄さんも御可愛そうね、お母さん御同情しますわ。家が貧しければ、その家の妻となる女は一層良くなかつてはととても出世は出来ないのでございますよ」

「そうでございますとも。それにつけましても、ね、貴女の様な御方があの小夜だと申しますと、妾もどんなに氣樂で、一雄もまたどんなに氣を大きくして小説をつくる事が出来ますのにと思ふのでございますよ」

「妾などは、とても何でございますけど……まあ何と申してお慰めしてよいか解りませんですの」

「有難うございます。それに心得の悪いのにも程があつて、近頃は毎日のやうに、三つになる兒を放りばなしにして置いて、外へ出て行きますので、それは、世話のやけること一通りではないのでございますよ。まあ、何の爲に外へ出て行きますか存じませ

んが、家へ歸へりますのは何時も晩でございましてね。いくらか
 お金を持つて歸へる様子なのでございますよ。こんなことを貴女
 へ御話申上るのも御恥かしいこととございますけれど、まあ、一
 家の妻でございます處から、外へ出てお金を持つて來ると致しま
 しても、ひよつとした間違ひでも出來ますと、一雄や私の顔にか
 へわりますからと申して、行先を尋ねますけれども、少しも、は
 つきりした事を云ひませんので、はい、氣にかゝるのでございま
 す」

と皺のよつた顔に、一寸眉をひそめて見せる。
 「まあ——」

と春子は、暫くは、呆れた様子をしてゐたが、
 「それは御心配でございませうね、お母さん。——それで、間違
 ひがなければ、いゝようなものゝ、もし悪い噂でも立ちましたら
 それこそ、大變で、一雄さんや貴母に、生き恥をかゝせるやうな
 ものでございますわね」

「そう思ひますので、どうかして、小夜の出先を知りたいと思つ
 て居るのでございます」

と心配でならない表情をして、うつむき乍ら根岸の方へと鐵道の
 踏切を、春子に助けられ乍ら、急いで渡ると、ほつと安心したや
 うになると、春子は老母の顔を覗き込み乍ら、

「それで、一雄さんも御存知ないのですか」と尋ねて、お淺が、

「いゝえ、一雄も、知らないのをごさいます」と云ふのを待つて、

「えッ。ぢや、自分の夫にも知らさないで、……まあ、不思議ですわいえ。……」

と意味ありげに、ほつと嘆息をつくののである。

春子は五年前一雄との戀に破れた。けれども、一度として、一雄の面影を心の中に描いて見ない日はないのである。小夜子は彼女の戀の敵である。小夜子あつた爲に彼女は戀に負けて今日まで

富を抱き乍ら、一度は親にすゝめられて嫁に行つたが、もといゝ愛のない夫婦は、ものゝ三月も春子と春子の新夫をつなぎ合せることは出来なかつた。春子は親の家へ歸ると同時に、失はれた一雄との戀を再び胸の底に燃やし始めたのである。

春子は如何にもして一雄を得やうと苦心して、幾度も一雄に言ひ寄つたが、もといゝ春子に心のない一雄は、取合はない。否、寧ろ春子の心を憐れに思つて、慰めてやつたのである。それを、春子は忽ち誤解して了つた。

一雄は自分を愛してゐる。けれども一雄には小夜子といふ妻がある。一雄が思ひ切つて自分の戀を容れないのも、此小夜子ある

がためである。

何と云ふ憎い女だらう。春子は、自然に小夜子を怨むやうになつたのである。

その内に、偶然と云うか、天の授くる幸機と云はうか、春子は思ひがけもなく一雄の母と、上野の山下で、ばつたり出會つた。

春子は好機逸しては、再びとらゆることが出来ないと決心して、胸中に描いてゐる苦肉の策を此時に施そうと考へたのであつた。

淺猿しくも亦、あはれな運命の女である。

根岸の里の一雄の細やかな貧しい家へ歸へるお淺は、春子に手をとられ乍ら、とぼく緩い歩みを運んでゐる。

一雄の家には、まだ十五町もある。春子の家はもう三四町の眼先に迫つてゐる。

春子の家の前へ来て了つては、もう話は出来ぬ。家へ立寄らせて内密の話をしやうと思ふが、この身すばらしい風彩のお淺は、とても自分の家へは入るまい。そして別れて了へば、百年の好機たちまちにして去つて失ふのである。たとへお淺が、自分の家へ來るとしても……あまりに汚ない風をした老婆を……と考へる春子は何處までも虚榮が強いのである。

こう考へ乍ら、春子は胸の中で烈しい煩悶をしてゐる、と、突然に、ちらと目に映つたものがある。

春子は、ハツと思つて立ち止まらうとして、ふとお淺が側そばにゐるのに氣がつく。と、また、何を考へたか、屹きつとなつて、再び、目を引いた彼方を見詰めると、其處そこに怨みに怨んでゐる小夜子の可憐な姿が見えたのである。

確かに小夜子に違ひない、而も、小夜子が半身は、よくは見えずぬが、半身は裸體である。家もあらうに、高山と云ふ、春子の一度嫁したことのある。あの西洋書家の家とは！ 自分の先夫の家であらうとは！

春子の胸は愈々亂れに亂れて來た。

彼女はもう何の考へる暇もなく、傍のお淺に向つて、

「お母さん！」

「はい」

「もし、あの小夜子さんに、悪い間違でもありましたら、お母さんは、どうなさる御積りなんですの」

と驚くお淺の返事を待ち構へて、お淺が、もじくし乍ら、

「それは、もう何うするも、こうするもございません。すぐに離縁えんいたします」

「でも一雄さんが否と仰有つたら……」

「一雄が何と申しましても、この私が承知いたしませんで、はい。また一雄も、その様に馬鹿でもございますまいよ、ほっほっ」

と無理に笑つて見せる。

春子は此處ぞと思つて、

「そう？ それはお母さん眞

個でせうね！ お家の名にか

ゝる事ですもの」

「何で私が容赦いたしますも

のか」

と云ふ内に、春子は得々然と

して、お淺を導き乍ら、

「一寸、彼處を御覽なさいよ」



と、高山果村の門内へ、足音を忍ばせ乍ら、お淺の袖をちよいと引張つて、門の内から、高山の書室を、桃色のカーテンの透間から、怖々ながらも、覗かせる。

お淺は、春子の舉動に不審を抱き乍ら、おづ／＼カーテンの透間から室内の様子を覗ふと、

「あッ」

と云つて、眼が晦みそうになつて、よろ／＼と二三歩よろける。春子は、驚いて、老母の手を握つて、助けた。

書室の内には、かやうな事は夢にも知る由のない、小夜子が、只一人、椅子に腰を下し乍ら、片袖脱いで、モデルになる、準備

をしてゐるのであつた。

二女二人

「あらつ、どうも飛んだ失禮致しました。何卒御許るし下さいまし」

「いゝえ、どうぞ其儘」

「あの——先生は未だ御歸へりではございませんか」

「あの宅でございますか？」

「はい」

「實は夫は只今箱根へ旅行して留守なのですよ、はゝゝ」



つと待つてゐた、小栗一雄の妻、小夜子であつた。相手の女は、

「えッ。それでは——あのモデルは何人が……」

と云つて驚いたのは、今迄椅子に凭りかゝり乍ら、半身の肌を脱いで、畫家の這入つて來るのを、今か今かと、どき／＼する胸を押へ乍ら、ち

高山果村の妻糸子であつた。

小夜子は、四五日前から此處へ通つて來てゐるのである。最初の日は、高山の留守で、其儘モデルにもならず、肌も脱がずして糸子と約一時間ばかりの親しい話を交したまゝ別れて歸つた、其次の日も其次の日もと、丁度今日で、四日か五日になる。小夜子は十四五町の處を毎日通ひづめに通つて、高山果村の門を潜ることは、潜るのであるが、何故か、今日まで、一度も果村書伯の姿はおろか影さへ見たことがなくて、その代りに出て來るのは、此家の主婦であらう。高山果村書伯の夫人糸子なのであつた。

糸子は、最初の其は、今日は果村先生は一寸外へ用足しに出掛

けて、多分歸りは遅くなるだらうと云つて、自分が小夜子の相手になつて、色々小夜子の境遇や何かを尋ねたり何かして、小夜子を歸へして下さつたのである。

で次の日に行つて見ると、其日も、やつぱり果村は留守で、代りには又例の如く糸子が出て來て、色々待遇しく



れたのである。そして丁度四日か五日の間といふものは、色々な事にかこつけて糸子の外には何人も果村の書室に這入つて来る様子がないので、今は、小夜子も、不審に堪えかねて、

「奥さま、それでは、暫く先生は御歸へりではないのでございませうか」

と糸子を一心に見つめる。小夜子は最初の日には、此糸子の顔を眞面に見ることが出来ない程、恥かしかつて、顔を眞赤にした。それが、親しみのある糸子の言葉や素振に馴れて、今ではもう、平氣である。それ處か、話の間には時折小夜子の笑ふ聲さへもする程である。

「えゝ。まあ。先生は、まあ貴女が約束の期限がなくなるまで歸りますまいと思ひますよ」

「まあ。それでは私。どう致せば、よいのでございませうか。奥様」

「期限がされるまで、毎日いらつしやいよ」

と糸子は、小夜子の可愛らしい姿を見て、頬笑む。

小夜子は、何が何であるか、五里霧中のやうな心持ちで、暫くぼんやりしてゐたが、言ひ憎くさうに、袖をいぢくり乍ら、

「でも、妾は、約束の期限だけはお金を頂戴して雇はれてゐるのでございませうか……」

と云つて、ちらと糸子を見る。と糸子は、例の無造作な態度で、

快活くわいくわつ そうに、絶たえず頬笑ほをみ乍ながら、

「いけませんの？ 小夜子さよこさん。書まの手本てほんになるよりも、こうして、仲なかよく御話おはなししてゐる方がいゝでせう」

と云いつて、小夜子さよこの手てを出だし抜ぬけに取とつて握にぎる。

「有難ありがたうございます。でも、それは、何なんの役やくにも立たちませんか
ら」

と猶なほもぢくして要領えうりやうを得えない様子やうすである。

「いゝえ、小夜子さよこさん。ちゃんと役やくに立たつてゐますのよ。小夜子さよこさんは御存知ごぜんじないの」

「どんな事ことでございませう」

と少しも解げし兼かねる。

「ちや申まをしませうね。小夜子さよこさんの御良人ごりやうじんは小夜子さよこさんの忠義ちゆうぎで立派うっぱな小説せうせつを書かき上げなさいませう」

「あれ」

「そうれ御覽ごらんなさい。役やくに立たつてゐる處ところぢやないではありませんか、ほゝゝゝ」

と相變あひかはらず、要領えうりやうを得えないやうなことを云いふのに、愈々いよく小夜子さよこは迷宮めいきうに入はいつたやうな表情へうじやうをすると、糸子いとこは何なにも彼かも、四五日にちい以來らいの事ことを打うち開あけやうと云いふやうな顔かほをして、小夜子さよこに向むかひ乍ながら、女中ぢやうちうが運こんで來きた茶道具ちやだうぐを、引ひき寄よせて、二つふたの茶碗ちやわんに、急須きふすか

ら茶を注ぎ込むと、一つを小夜子にやつて、小夜子が遠慮するの無理にすゝめ乍ら、自分も、一つの茶碗を取り上げる。「ねえ。小夜子さん、定めし妙な家だと思ひなすつたでせう。實はこうなんですよ、小夜子さんが最初宅へあの口入婆さんの世話でいらつしやつた時は、先生も、書の實物手本——モデルと申しますね——それが必要だつたのです。それで、丁度いゝ時に小夜子さんがそのモデルにならうと言つてお出なすつたから、此畫室へ通して、上げましたのが、突然、先生のお友達が澤山箱根へお出で、先生にも是非行くやうにと其日、丁度貴女が此畫室で御待ちになつてゐる時、電報が参りましたの。それで急に明日でも

歸るやうな事を申して出掛けましたのが、それ、行先が餘程面白い處と見えまして、歸へるのを忘れて居るのですよ、ほゝゝ」と言つて、机の斗抽から、數枚の繪葉書を出して見せる。それは皆、果村書伯からと、箱根のお友達といふ人々から、糸子宛に、歌やら、文句やら、繪やらを、なぐり書きにして毎日寄越したものであることが、小夜子に解つたので、「では、奥様。何故先生は急にお歸りにならぬと仰有つて下さいませんかしたか」「ほゝゝ、小夜子さん、心配御無用。まあ御聞きなさいよ。その譯をこれから、ぼつ／＼御話致しますわ」

と冷えかけた茶を啜り終つて、

「で、小夜子さん、最初お逢ひしました日ね。ほら、小夜子さんが片肌——丁度今日のやうに——脱いで、手本の用意をし乍ら私の姿を見て大變驚なすつた日——」

といつて優しい眼ざして、頬笑み乍ら小夜子を見ると、

「あらッ」

と云つて小夜子は顔を赤くする。

「その時ですよ。色々小夜子さんの身の上話をお聞きしてゐますと、私知らずく涙が出ましたの。まあ何といふ可愛そうな方でせうと思ひましてね。せめて、こう云ふ御方に、多少でも御力

になつて上げたらと思ひまして、主人は歸らない様子でしたけれども、そんな事は貴女に言はずに。——もし申しますと、貴女は豫め差上げて置きました御金など、屹度返して御了ひなさるか——毎日かうして、用もないのに來て戴きましたのよ。ほ、と言つて熟々と小夜子の美しい容貌を見詰めて居ると、小夜子は糸子の親身も及ばぬ、美しい親切の心に、動かされて、袖を顔に當てると、聲を出して泣き出したのである。

糸子は驚いて、椅子から、距れると、小夜子の側へ近寄つて、

「何と云ふ、いちらしい小夜子さんでせう」

と云ひ乍ら、小夜子を轟々と抱き締めるのであつた。



小夜子は少女のやうに、糸子の胸に顔を當て、泣きしやくつてゐたが、ふと思ひ出したやうに、糸子の側から距れて、

「奥様、有難うございます。妾何と御挨拶申上げてよいやら解りません」

と如何にも感謝に堪えない風である。

「小夜子さん。御家には、こん

な事内證ですよ。でも、家に置いてゐらつしやる御嬢さん——何とおつしやるんでしたつけねえ」

「芳子と申しますの」

「そう芳子さん？ でも芳子さんが、母ちゃんを此高山の伯母ちやんに取られてお可愛さうですこと」

「いゝえ、そんなことは、家には義母も居りますので」

「でもお乳は小夜子さんにしきやありますまい。ほゝゝ」

小夜子も糸子の無邪氣な少女のやうな心持と言葉——何の世の中なかの悲かなしみも知らないやうな言葉を聞くと、どうしても泣き笑ひせずにはゐられなかつたのである。

「私小夜子さんを妹と思つてよ。いけませんか？」
 「奥さん。有難うございます」
 こう云つて、糸子の手を、堅と握りしめたのである。
 「芳子さんを連れて今度はお遊びにゐらつしやいよ」
 糸子と別れるとき小夜子の耳端でこう云つたのである。

三 決 心

一雄とお淺は膝をつき合せて座つてゐる。お淺は、長煙管に、もどかしそうに煙草を詰め乍ら、ちつと一雄の様子を眺めてゐると、芳子は可愛い赤い頬を、一雄の無骨な胸に押しつけたま

ゝ、すやく／＼小さな躰を立て、睡つてゐるのである。
 「一雄や、お前は、どうお考へかえ」
 と劔のある聲で、仲々勢が強さうである。
 「お母さん。そんな馬鹿な事をあの小夜子に限つてする様な氣づかいはありません。お母さんは誰かに、いゝ加減の事をお聞き



なつたんぢありませんか」

と、云ふ一雄の頬には、もう涙の露が、こぼれかゝつてゐる。何故お母さんは、あの可憐そうな小夜子を、こう迄も憎まるゝのだらうかと、そいろに情なくなるのである。一雄の顔色は何時になく蒼褪めてゐる。

と、お淺は、もどかしさうに、いらくし乍ら、

「お前はそんな風だから意氣地がないといふのですよ。お前はかりではない。此小栗の一家に泥を塗るやうなことになる。現になつてゐるから、私がこう心配してゐるのに、まだお前は母の私が言ふことを疑つてゐるのかえ。随分甘い亭主だね。齒痒い〜」

と、唾を飛ばして、我一人子を無性に叱りつけやうとするが、従順な一雄は、小夜子をかばふ様に、一人の母にもまた弱く、少しも反抗の色を見せやうとはせぬのである。

然し乍ら、一雄は男である。そうく何時迄も、ぢつとして母の暴言を攻められてゐるものではない。生活難についての苦言は一度々々申譯がないと云つて、詫びるものゝ、小夜子の操を疑へよと、疑へよと、攻めらるゝ言葉には、少なからず、むつとす

「お母さん。貴女は、小夜が外で操を毎日汚してゐると仰有るんですか。え？ 不義を働いてゐると仰有るんですか。それは一

體誰とですか？ 何處でいす？」

と詰めかけたが、聲の大きいのに驚いたものか、

「ツツ」

と芳子が泣き出したので、

「おゝ、よし〜」

と、すかしたりなだめたり揺つたりして、やつと泣き聲が納つてもと通りに、一雄に抱かれたまゝ、膝の上で、無心に睡つて了ふのを待つて、お淺は憎々しげに、

「今時分、そんなに眞面目になつて言はなくつてもいゝ。もう遅いよお前、何故今少し早く確乎しませんか。小夜子には眞個に甘

くつて、お母さんが、何か少し苦い言でも云はうものなら、直ぐ喧嘩腰になつて……」

一雄は一寸垂頭れて、

「お母さん濟みません、つい氣が落ちついてゐないものですから」

「まあ、そんな事はいゝとして、お小夜風情の女が外で稼いだ處で、毎日一圓といふ纏つた金を拵え得る譯がない——といふことを考へても解りませう」

「そう仰有れば、さうです」

「それに、一家の妻——亭主を持つ若い女であり乍らさ、ね、一

雄。毎日出て行く先を内證にしく置くといふのは、如何云ふ譯だらうかね」

と小夜子に取つて、絶大の苦痛である。出先を秘密にすること、——をお淺は一つの楯として、重ねて曇みかけるのである。

「いくら貧乏はしてあるとも、夫に黙つて毎日外へ出て夜になつて、やつと歸つて來るといふのは、ちと、合黙が行かぬとは思つて居りますが、お母さんに、そう云はれて見ますと、多少疑はねばならぬことになります」

「勿論ですとも。それだけでも、小夜子の不義は充分に證據だてることが出来る筈です」

と、煙草の煙を、ぼうと吐き出して、火鉢の椽で、ボンと煙管を叩く。

「で何かお母さんは、もつとしつかりした證據でも………」と云ふのは待たす、

「證據も證據。お母さんは、今朝外出しましたね」

「はあ」

「あれはお前何の爲に外へ出たのだとお思ひかえ」

と、一雄の方へ、益々膝を乗り出して、握つてゐた、煙管をぼんと放ると、今度は、膝の上に兩手を置いて、開き直つた様な形となつた。



一雄は、また芳子が眼を覺ま
しはしないかと思つてはらく
する。

「別に私は何とも思ひませんで
した。それに一生懸命小説に氣
を取られてゐたものですから」
と辯解らしく云ふと、お淺は小
腰をかゝめて、

「あまり夢中に過ぎて、自分の
女房を人に取りられちや困りませ

うよ」

と一雄を蔑むやうに言つて置いて、一段と言葉に力を入れる。

「實はねえ。お前には、何とも云はなかつたが、私は、小夜子の
後をつけたんですよ」

「えッ。お母さんがッ」

と喫驚する一雄を捕へて、

「で、私は、小夜子が、何所へ行くかと、見え隠れに跟けて行く
と、驚くぢやないか。「一雄！」

「えッ」

「小夜子は、私が後ろから見張りをしてゐることには、氣がつか

す、西洋書家の家へ這入りました」

一雄は、もう一言々々應答するのが苦しくて、默然として、垂頭れてゐるばかりである。

「で、暫くお前私は家の外の植込の影へ隠れてゐると、小夜子は、家の中で、着物を脱いで了ふぢやないか」

「着物を！」

「そうですよ。あの小夜子が」

「畜生！」

とざりくく齒を喰ひ縛つて、如何にも口惜しそうに、ぼろく涙を零し始めた。

「何と云ふ西洋書家です」

と拳を握り固める。蒼い顔は益々蒼くなつて行く。

「その書家は、高山果村といふ女狂ださうだよ」

「ウーン」

と一雄は無念そうに兩眼を閉ぢた。が暫くして、お淺に向ひ乍ら面目なさうに、

「お母さん！ 面目がありません。今まで私が餘り意氣地がなかつたので、こう云ふことになつたのです。私はお母さんを信じます。お母さんが、既に確かに見てゐらつたことです。だから、それが充分の證據です。今日迄は、私の目が眩んでゐましたから、小

夜の動作が、美しくばかり見えてゐたのです。私は最早昨日の雄ではありません。もうすつかり眼を醒めました。何卒お母さん許るして下さい。私は此んな忌はしい噂が世の中へ知れ渡らぬ内に、お母さんの努力のお蔭で、恥を防ぐことが出来るのを有難く思ひます。お母さん、私は貴母に何と御禮をしてよりやら解りません。もう小夜子は一刻も此家へ置く事は出来ません。断然縁を切つて了ひます」

と垂頭れてゐた頭を上げて、お淺を見ると、お淺は、嬉しさうに、

「そうですねとも、そうですねとも。家の名にかゝはらぬ先に定める

ことは、さつさと定めて了はねばなりません」

と、いくらか、くつろいだ様子に、一雄は、猶も無念やる方ない風で、

「でも、お母さん。私の心を御察して下さい。どんな辛い思ひをしてゐますか……」

「えゝ、えゝ、お察しするとも」

と一寸芳子の方を見て、また見ぬ振りをする。

其處へ、哀れにも、小夜子は、何事も知らずに歸つて來たのである。そして、如何にも、白け切つてゐる茶の間の光景を一目見ると、はつと胸を躍らせたのである。

「芳ちゃん。芳ちゃん。母あ
ちゃん歸へりましたよ」

と云つて、そつと一雄の膝の
上を覗くと、

「まあ、睡つてゐますの？」

と獨言を云つて、更めて、お
淺に向ひ、

「どうも遅くなりまして、濟
みません」

と挨拶をして、



「貴郎。一雄さん。芳子にお乳をやりませう」
と兩手を差し出したが、不思議にも、何時も自分を慰めて呉れる
夫が、今日に限つて、默然として、振り向きもしないのを、不審
に思つて、

「貴郎！ どうかなさいましたの？」

と尋ねる途端に。一雄は何とも言はず、五月蠅さうに、つと立ち
上つて、芳子を抱いた儘、つかく書齋としてゐる自分の居間へ
這入つて了つた。

四 誰の罪

「小夜子！ 少し話があるから、そんなに、迂路々々して立つて
おなくつたつて、お座り」

「はい。あの——何か……」

と云はせも果てず、お淺は小夜子を睨みつけたまゝで、

「まあ、何でもいゝから、一寸お座りなさいと云ふんですよ」

迂路々々して、今にも泣き出しそうな顔をしてゐる小夜子は、

素直に、お淺の前に、小さくなつて座り乍ら、垂頭れて了つた

と、時々、おづくお淺の顔色を窺ふのである。お淺は暫く黙つ

てゐたが、やゝ、あつて疝高い聲で、

「お前は、小栗の家へ何をずる爲にお出かね。こんな暮しの立て



方で行先はどうおしだえ。お

前が嫁に来てからといふもの

は、もとより餘り多くもない

身代——それが段々失くなつ

て行つて居るぢやないかえ。

お前の様に、小栗の家に一寸

腰かけに来てゐる方は、それ

でよいかも知れないが、私達

親子は如何します。え」

とお淺は息をもつかず、まく

し立てるのに、小夜子は、おろくし乍ら、きちんと、両手を膝の上につかねて、何と返事をしていゝものか、途方に暮れてゐるのである。

「はい。どうすゑと申しまして……」

と言ひ淀むと、お淺は横合から、

「何の考へもなく家を貧乏にして置いて、それで一雄が世の中へ出られますかといふんですよ、小夜子！」

「はい、お義母さん。一雄さんを出世させたいばかりに色々苦勞を致しますので、それにツイ子供がありましたりするので、はい、思ふやうに一雄さんをお助けして、お義母さんに少しでも

お樂をさせることが出来ないでございませう。どうぞ御勘辨なすつて下さいまし」

と膝の上に涙を一つ二つ、ぼとりくと落して、慌てゝそれを隠すやうに拭き取る。

「貧乏だの子供があるのつてお前……」

とお淺が云ふのを、さへぎつて、

「いえ、決して、妾は、貧しいの子供があるのつて、それを口實に、致せねばならぬ事を、怠つてゐる譯ではございませぬが……」

と云ふ小夜子の言葉の後を受けて、お淺は憎らしそうに、

「それでは、何故小説家の家でも、小栗一家ばかりはこう貧乏に貧乏をするんでせう。御覧なさい。毎日のやうに、色々の人が、金を取りに来るのを、お前が近頃のやうに内を外にして家の中に寄りつかぬやうにしてゐると、私——年老の私が——一々その人々に断りを云はなければなりません。何と云ふ不始末でせうねえお前は外へ出て、いゝお楽しみだらうがね……」

と云ひ終つた處で、小夜子は、もう何とも言ひ様のないので、暫くは唇を噛みしめて、涙ばかりぼろ／＼零してゐたが、もう、たまらなくなつたものと見えて、行なり、

「ワッ」

と泣き出した。その内にも可憐な彼女は、すべて家の中の不自由不如意を一身の過と考へたから、涙聲で、

「お義母さん、妾が、不束女で行き届きませんから、どうぞ、御許るし下さいませ。什のやうなことでも致しますから」

と一向お淺に憐れみと許るしとを乞ふのを、尻眼にかけて、

「あゝ、あゝ、私は何と云ふ不運な者だらう。この年になつて、世帯の苦勞から、子供の世話まで焼かなくてはならんのだから」と、ことさらに吐息をつくのである。

「お義母さん。妾が悪うございました。これからは注意を致しますして、もう外へも出ませんで、家で働きますから……」

と云つたが、考へて見ると、書家のモデルになつてこれ迄少か一
 圓でも毎日稼いで来て、家の助にもするが、家に居て働いて見た
 處で、稼ぎ得る金高は女の腕——それに乳呑子もあることだし、
 ——高が知れてゐる。あゝどうせう。どうして一雄さんの、今完
 成に近づかうとしてゐる。あの小説——それが出来上る迄、内助
 することが出来やうか——と、胸をいためてゐるのを、心地よげ
 に見たお淺は思ひ切つた様子をして重々しく切り出した。

「小夜子！」

と呼ばれて、小夜子はぎよつとしたが、優しく、

「はい」

と返事をして、又垂頭れる。
 とお淺はつづけて、
 「もう外へ出なくつてもいゝ
 だらうが、家にも居なくつて
 いゝよ」
 と云ふ聲は雷鳴のやうに小夜
 子の耳に響いたので、驚いて
 「えッ」と思はず叫ばすには
 められなかつた。

「小夜子。お前は、あの高山



果村といふ書かきの家で、何をしてお出でか」

「エーッ」

「何の爲に裸體になんぞ、お成り！」

「も、も、も、申し譯もございません」

「何ですと、只申し譯がない？それでいゝのかね、これ、小夜子小栗の家名へ泥を塗つて、それでいゝのかえ。」

「お義母さん！ そ、それはあんまりでございます。私は高山の家で、そ、そんな淫らなことなぞ………」

「いゝえ、ちやんと此私は知つて居りますぞ」

小夜はもう何も云ふ事が出来なくなつた。只止め度もなく、



情ないといふ心から、涙ばかり湧いで出る。

「さあ小夜子もうお前の申譯は何にも聞度ありません。家に居なくてもいゝから、何處でも好いた處へいらしやい小栗にはそんな不埒な嫁は要りません！」

「でも、これには、深い事情がありますので。」

と云つたが、お淺の心は、この哀れな小夜子の苦衷を容るゝには餘りに狭く。餘りに固かつた。

今は最早詮術もない。取りつく島は？ 只自分の心を知つてゐる筈の夫である。頼は只少かに、懸つて此夫の心一つにあると思つた小夜子は、泣き崩れ乍らも、身の周圍をたゞして。

「お義母さん。御免下さい」

と云ふより早く。ばた／＼と一雄の部屋へ来て見ると、一雄は絶望に陥つた、者のやうに、壁に凭れて、腕組をしたまゝ、頭を垂れてゐる。と、その側に、一雄の座蒲團を敷いて、その上に無心の芳子は、すやくと、夢をみてゐるやうである。

小夜子は一雄の心を只一つの頼みとして、来て見ると、どうやら、夫もお淺と同様らしいのに、がっかり氣を落して。夢を辿るやうな心地になつて了つた。が氣を取り直して、一雄に向つて、自分の身の潔白を訴へた。

嗚呼！それは無駄であつた



「お前の身の潔白であるといふことを證據立てることが出来る迄私はお前を離別する！あゝ。あゝ、私はお前の心を見損なつてゐたんだッ。心の愛は、物質の慾に勝てないものかなあ！」
一雄は只これだけ叫んで、以外に何事も云はず、何事も聞かうとはしなかつた。

五 母一人子一人

小夜子が芳子を抱いて小栗の家を出てからもう二日になるが、その二日といふ短いやうな長いやうな間を、女親子は何處を如何漂ようたか。小夜子にも至るで夢のやうに茫としてゐて、一向判



断がつかぬ。
根岸の家を出てから、其足で賑やかな上野廣小路の方へと、夢中で歩いた。
小夜子の家は、小夜子が、小栗の家に嫁してから間もなく破産して了つて、一年餘り前に、兩親共、土地にも居られない始末に遠く海外へ航て了つた。それから、二三度朝鮮から手紙が

来た。三度目の手紙には、母親が異境の空で敢なくなつてしまつた事を報じて来たのであつた。それ以來、母の遺骸は、何處に埋めたとも何とも云つて來ない。小栗の家から送つた手紙は符箋が幾枚も附いて戻つて來たのである。父の行衛——沓として知ることが出來なくなつてゐるのである。

里家の親類は、それからやがて、一軒々々と散り／＼になつた。今でも元の處に残つてゐるものは、大抵は以前より一層貧に陥つてゐるか。それとも一躍に富を擱んだ連中であつて、小夜子とはもう何の頼りもし合はず、また其存在すら忘れ合つてゐる程の間柄であるから、追放の状態にある小夜子には何の力にもなるもの

ではないのである。

それをよく知つてゐるから、小夜子は死んでも彼等の門に身を屈して憐れを乞ふやうな愚をしないのであつた。

「芳ちゃん、芳ちゃん。母ちゃんとお前は、もう今夜から寝る家がありませんのよ、母あちやんが。悪いことをしてお父ちゃんやお婆ちゃんに追



ひ出されましたのよ。」
 と幽に涙に腫れ上つた眸を、しばたきながら、芳子を揺起すやうにする。

「お母ちゃんのお蔭でお前まで行く處がなくなつたわねえ。」

とぼとりと、涙の固りを芳子の寝顔に落すと、冷めたかつたものと見えて、芳子は急に見揺るぎを始めて、ぱつちり眼を開いた。

と小夜子は、あゝ起すのではなかつたと思つて、急に揺り、乍ら、両手に芳子を固乎と抱きしめたまゝ、

「芳坊はいゝ子よ」ねんねしな。芳坊はいゝ子よ。ねんねしな。寝んねよ。寝んねよ。寝んねしな。坊やのお夢は何の夢、坊やの

お夢は何の夢

と再び自分で起した芳子の夢を、結ばせやうとして子守歌を唱い始めた。

その美しい透き通つた、

小夜子の歌ふ聲が、上野の森に木魂を反して、何處からともなく「芳坊はいゝ子よねんねしな」と哀れに霧を帯びて、幽かに幽かに響い



て来るやうである。

小夜子は草履を引き摺つて、上野の人混の中へ紛れ込んで一時は其姿を隠して了つたが、やがて、再び現はれて来る時には、小夜子は、彼女の運命を左右すべき、一振の短刀を懐深く秘めてゐたのであつた。

小夜子は再び上野の森をさして、すたく／＼歩るき出した。

けれども、凡ての動作はもう狂人のその如く、兩眼も既に眩んで了つてゐるやうに思はれた。

木下闇には月の光も洩れず。只さら／＼と揺れ合ふ木の葉の私語のみが小夜子の忍び泣きに交つて夜の寂寞を破るのみであつた。

た。

小夜子は何處を目的ともなく、歩るく内に、淋しい、平生ならば、若い女には怖ろしかるべき筈の森々とした一面の荒れ果てた墓地へ出た。

其處に小夜子は、残る半生の行く可き場所を探さうとしたらしかつたが、其處等一面を迷ひ／＼歩るく内に、足も手も、すつかり疲れ切つて。途ある、汚ない叢の中に幾年となく倒れたまゝの石塔の上へ、よろ／＼とよろけるはづみに、どつかり腰を下ろして、ほつと息をつくともう何をする力も失せ果てた様に、ぐつたりして了ふのである。

小夜子は四邊を見廻したが、目に映るものは、其處等一帶に、
 藪々と不規則に立ち列ぶ眞黒な坊主頭の古い石の塔ばかりである。
 小夜子は、暫く瞑目してゐたが、疲れの爲に、睡氣が襲ひ來る
 と、はつとして、手早く、懷へ片手を差し入れ片手を芳子の脇
 へ入れて確乎抱き乍らすらすらと取り出した五六寸に餘る刀の鞘を
 拂つて、昵乎と眺めてゐたが、またふと、芳子の夢見る顔に瞳を
 落すと、無性に悲しくなつて、涙を瀧のやうに流し始める。
 兎角する内に、又、睡氣は小夜子の眼を襲つて來る。と、また
 小夜子は屹度なつて、刀の刃を打ち守る。
 安心の土地、永遠に安樂を得る國、小夜子の行く可き處は、正



此永遠に何の苦もない處であつたが、弱いものは女である。斯く迄思ひ詰めた決心は、只芳子の無心な頬の色に、はしなくも挫かれて了つた。

小夜子は、逆手に短刀を握り詰めたまゝ、如何することも出来ずに、不覺の涙に埋れて了つた。

遠の森では、夜を世界の梟が悲し氣に鳴く音が、ぼう／＼と墓地の方へ響いて来る。

「おゝ、芳ちやん。勘忍してお呉れ。母ちやんが悪いから芳ちやんに迄——未だ何にも知らない芳ちやんにまで。こんな悲惨な目に逢はせるのねえ。おゝ、寒いだらうおゝ寒いだらう。」と云つて

何か芳子の上から、着せるものをもと思つたが、何物もない草と石親一人子一人を守るものは、暖かい家と、柔かい蒲團ではなくて、今夜からは、恐らくは、この草と石位なものであらう。

石の枕に、草の褥——あゝ何といふ變り來つた、親子の有様であらう。懐かしい一雄

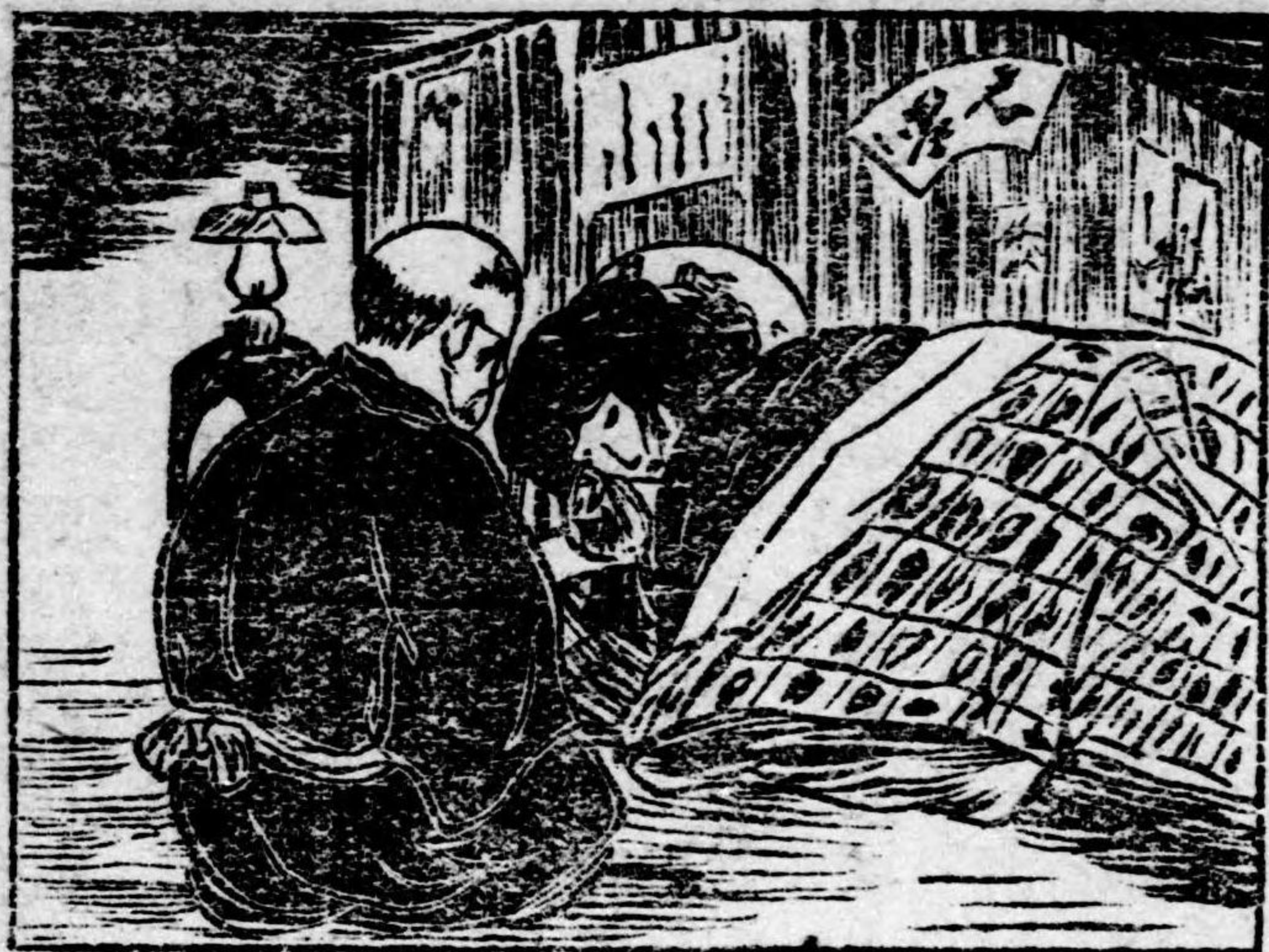


の聲の代りには、時々木の枝で鼻が氣味悪い鳴き聲を二人の宿なし者に與へる。

X
X
X
X
X
X
X
X

小夜子は一日の間飲まず食はずで、將來の方針を定める——即ち、自分の身の潔白なことを一雄に一度示すことが出來て——死にたいと云ふ考へから、しばらくの間と思つて、何の希望もなく品川の方へ歩いて行く内に、途中で倒れて了つた。

芳子は其場へ放り出された、が、通りがりの老人に救はれて眼が覺めて見ると、小夜子の體は、いつの間にか、品川在の漁夫



の薄暗い家の中にあつたそして、芳子は、彼女の傍らにこれも靜かに寢せつけてあるのに、驚いて、家人に尋ねると、家人は、小夜子が、昏倒してからの事を細々語つて聞かせるのであつたが、小夜子は、涙を流して伏し拜むやうに、家の人の親切な心を謝したのである。

數日は、其家で過したが、

小夜子の體が、元の元氣に恢復すると、彼女は何時も其貧しさうな漁夫の家にあるのがつらくて。色々考へた末に、何かと方針を立てねばならぬ處から、一應其家を辭することに決した。が、此家を出れば、さて、目的として行く先は何處にもない。

あゝ、自分は倒れた時に死ねばよかつた——と思ふものゝ、矢張りそれも芳子の身の上を考へると、また思ひ直すのであつた。小夜子は、身の廻りのものはあらかた賣り盡した。としてそれを一時の禮にと云つて其家へ置いた自分の今の境遇を老人に語つて止むるのも聞かず又廣い世界へ迷ひ出て了つたのである。

六 悲しき家

「おや。春子さんでございますか。ようこそいらつしやいました。こんな穢苦しい汚ない家へ……さあ、く何卒御上り下さいませよ。」

とお淺は上野山下で春子に馳走されたことから、何から春子がまだ、疊の上へ上り切らぬ先へ、べらく火のつくやうに列べ立て悦に入るのである。

「今日は一雄さんはお家？」
と諷びた眼付で老母を眺めると、お淺は、頻りに喜び乍ら、そわ

くして、手足が落ちつかぬ様子である。

「はい。一雄は一寸用足しに出掛けましたが、何卒春子さん、御悠然御話し下さいませよ。まあ。ね。よく御出で下さいました。御親切があればこそ、こんな汚ない場末まで御出掛け下さるといふものです。」

と、お淺の前に、やをら座つた春子の容貌や、風彩を熟々眺め乍ら、三日前に泣く泣く此の家を去つて行つた、みすばらしい小夜子の風彩とを比べて見て、その差間の甚だしいのに一度は驚き、一度は、まあ此様な美しい艶やかな女を一雄の嫁にもと考へてゐるのである。

「相變らずお心にかけてお尋ね下さいまして、何から何まで御世話に與りましてね。眞個に御恩返しが出来ますかしらと、始終、一雄と申し合つて居るのでございますよはい。」

「おほい。お母さん。あんなこと、妾嫌でございますよ。何も御世話らしい御世話なぞ少しも致しませんのに。」



と春子は一寸羞耻む様子を見せ乍ら、縮緬の華美な帯の間に、か
らませる女持ち時計の金色に光る鎖を、弄り乍ら、時々室内の様
子を見る。

「あれから一度も一雄さんに御逢ひ申すことが出来ませんが、
お母さん何だか一雄さんのお様子が少し變だと思ひますわ。」
とぼうと紅潮する。と、お淺は飛んでもないといふ風で、

「少し變だと申しますと………」

「妾がお尋ねする時は何時でもお留守なんでせう、妾何だか一雄
さんに嫌はれてゐるのぢやないかと思ひますと心配でございます
わ。」

と恥かしそうに垂頭むく、とお淺は、

「あれまあ勿體ないことを仰有います。先達御話し申し上げました
様に、若し貴女のやうなお優しいお方を、一雄の嫁に、假令三日
でも四日でもいゝから、頂ける事が出来ましたなら、一雄も私も
どの位嬉しがらうと思ふのでござりますが、何を申しまして
も、家は御覽の通り乞食同様の貧乏で、一雄と來ましたら、あの
通りの働きなしではあるし。それに、邪魔者の私が手足纏ひの厄
介者でございますから。仲々おいそれと急に嫁に參り手がござい
ませんのです。」

と思痴を零すと、春子は、もう堪り兼ねたものと見えて、

「とんだことですわ。お母さん！」

とや、聲に力を入れお淺の方に、にじり寄ると、

「あの——妾見たやうな詰らないものでも宜しうございましたら

——何卒一雄さんの妻に……」

と了ひまでと言ひ切れず、眞赤な顔を、絹ハンケチで隠し乍ら、
疊の上に打ち伏しになつた。

「あつ！」とお淺は驚いたが、

「それはあの——御冗談ではございますまいね。と申しますと失
禮でございますが、それは本氣で仰有るのでございませうね春子
さん！」



と飛び上る程嬉しがり始めたの
である。春子は漸く顔を上げて
まだ幾らか眩しいやうな心地で
あつたが、

「でも、一雄さんの御氣に召す
かしら。」

と一寸悄氣けて見ると、お淺は
氣軽るに、春子の手を執り、

「そんなことは、もう御心配は
少しもありませんので、兼ね々

「貴女の御噂も致しますことだし。私が斯うせると申せば、直ぐ其通りになる一雄でございます、貴女さへ、こんな汚ない小屋同然の家へ眼を閉ぶつて、御出下されることが出来ましたら——出来ませうかしら」といくらか不安な心地になるが、

「一雄さんさへ許るして下されば、妾の親は妾の願ひでございませもの、何の許さないことが、ございませう。」

とやゝ希望に輝く瞳を据えて早く一雄よ歸れかしと心の内で祈つてゐるのである。

「まあ、私は全るで夢を見てゐる様でございませう。あんな我儘勝手な小夜子が居なくなつて、その代りに貴女の様なお優し

い。美しいお方がお出下されるとは！」

と云つて猶ついで、

「一雄が歸へりまして左様云ふことだと知りましたら、如何に喜ぶこととでございませう！」

と氣も狂せんばかりに、そわ／＼するのである。と其處へ、悄然として、最愛の妻に背かれて、悲哀に埋もれてゐる一雄が、つか／＼歸つて來た。

「あら一雄さん、何時御歸へりなすつて？」

と媚びる様に一雄に言葉をかける。お淺はと見ると、これは又、絶えてなく莞爾してゐるのを一雄は少からず意外に思つてゐるが

或は多分、近來氣嫌の悪い老母を、最前から、この春子が感めて
ゐたのであらうと考いて見た。

「春子さん。先日は母が大變な御馳走になりましたそうで、有難
う。それから母のことを色々と御世話下さいますそうで——五年
も前に全然音信不通の貴女と私が孤獨になる頃に、突然に再び昔
のよしみを繰り返すと云ふものは何といふ奇な邂逅ひでせうね」と
其儘、二人の側へ席を占める。

「眞個でございますわ。妾今少ししつかりしてゐますとね、今少
しよくお母さんの御世話も出来るのでございしますが、何を申しま
しても無教育者の不束女でございしますから、残念でございしますの

よ。

「滅相な——貴女無
教育者とは一雄の先
の嫁のことでござり
ますよほゝゝ。」

と愛相笑ひをして、
ふと、一雄を見ると
先の嫁と我母親の言
葉に、何氣なく別れ
去る時の哀れな小夜



子の姿を思ひ出したのか、愁然として、傍を向ひてゐたが、いきなり立上つて、部屋の片隅に、こじんまりと据えてあつた小夜子の、貧しい鏡臺の側へ行くと、一抱にも足らぬその鏡や小道具を、むづと引摺んだと思ふ間に、土間へがらくと放り出して、驚き騒ぐ二人の者には無頓着の様子で、暫くの間はその破れて、散りぐに元の形を留めない破片を眺め乍ら、涙ぐんでゐる。とお淺は、

「これ、一雄や。お前あの鏡臺を何故破したんです！」と叱りつけやうとするのを、

「何に！ これで清々しましたよ。なまじいあんな物を見ると、

頭がむしやくしやして仕様がありませんでした。小夜の物があれば、これから、見つけ次第に、どん／＼破壊するんです。破壊！破壊！これからは破壊です！そして破壊が済んだら、今度は新らたに今迄とは違つたものを——凡て今迄とは違つたものを建設するんです！破壊の後に來る建設！あゝ考ゆるだけでも気が清々せる。」

こう云ひ終つて又元の席についた。

「そうですよ。よく氣がお付きでしたね。何でもこれから新らしくするんです。で、一雄や。其序に、新らしいお前の内助者を早く決めて御了ひなさい。」

と出し抜けに言はれて、一雄は、

「あは、う、う。それは未だ早いですよ。それに今のやうな貧乏ぢやね。來手がありますまい。」

と云ふのを、もどかしさうにお淺は、ちろりと春子を顧み乍ら、
「その貧乏の此の家へ、好んで來るといふ人があつたらお前どうします。」

「あは、う、う。先づ其様云ふ人は今の世の中にありますまい。」

「處が、一雄や。ありますとも、あればどうすると尋ねてゐるぢやありませんか。もどかしいね。」

「一體誰です。私の家へなんぞ飛び込んで來やうといふやうな女



は？」

と一雄は神ならぬ身の、それが現に自分の前に、綺羅を凝らして座つてゐて、此他愛もない問答を一心になつて傾聴してゐる、當の春子だと知らぬのであるから、こゝろ聞いたのであるが、お淺が春子を一寸指して、

「此春子さんですよ。」

と云ふの耳にすると、はつと上氣して、耳が茫と鳴るやうな氣がした。

「眞逆か春子さんが。再縁の方でもあるまいし。あゝお母さんに脅かされた。」

といふのを聞いたか聞かぬか、お淺は眞面目になつて、

「お前、御當人の春子さんの前で、そんな冗談が云へますか、考へて御覽なさい。」

こゝに於て、一雄も餘りに我母の眞面目な様子に氣を奪はれた調で。

「それは眞個ですか？」

「お前まだ疑つてゐるのかい。解らぬ人だね。春子さんに對しても、失禮ぢやありませんか。それとも、まだ、あの不貞腐れの小夜子に未練でもあつて……」

と云ふのを一雄は驚いて打ち消し乍ら。

「そうですか。それが眞個だとすれば……」

と一寸春子の方を見ると、端なくも春子の視線と思はず打ち突かつて、何と思つたか、春子は身を起して、

「一雄さん！」

と一雄に、獅噛みついて了つた。

「かう云ふ貧困の極度に達した私の家へ、故意に来て下さるとい

ふ御志は實に辱けないです。春子さん感謝します。それでは、来て戴くことに致しませう。」

と云ふのを聞くと春子は嬉しげに、お淺を見返つて、

「お母さん、一雄さんは御許るし下さいました！」

と泣かんばかりに言ひ放つたのである。

「然し、今日明日といふ譯には行きません。何れ。私から、春子さんの家へ御伺ひしての後に致しませう。」

「はあ。」

春子はこう云ふより外に返事の仕様がなかつたのである。

セウたがひ

小説家の最も欲すものは——色々あるであらうが——その内でも、旅行である。想を練り、思ひ凝らすばかりでは眞に傑作を生むとは云へない。只神來の感興は誠に徒然の旅行にある。

小栗一雄は貧しい。であるから旅行らしい旅行の一つもした事がない。只少かに、最愛の小夜子を貰つた時に、思ひ切つて新婚の旅を湘南の海濱にしたことがある。それは三年前の夢、今は到底、思ひも及ばぬ。

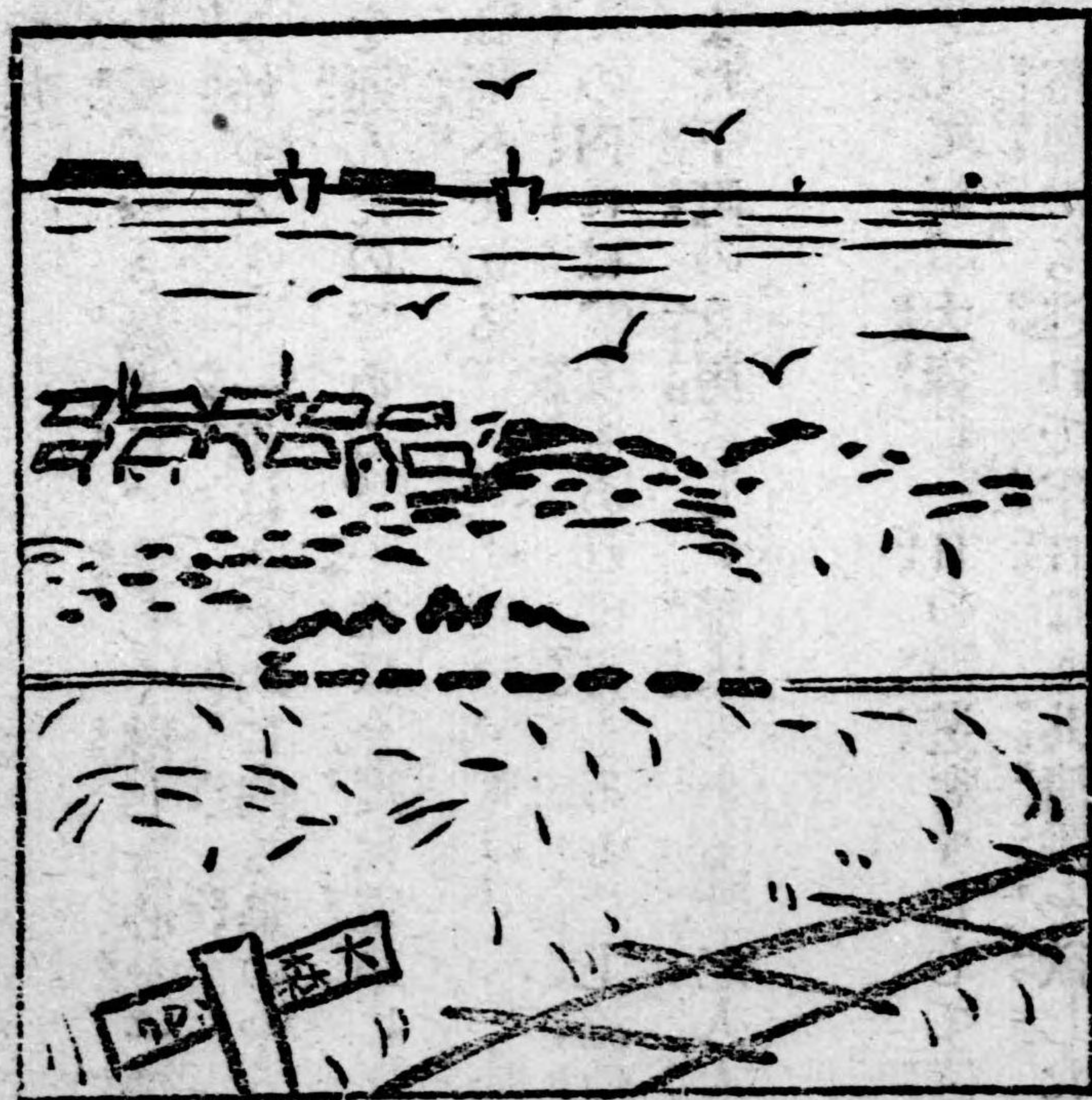
小栗の家には殆んど毎日のやうに春子が訪ねて来てはお淺と一

雄の機嫌を取るのである。一雄は別にそれを五月蠅とも思はぬ、否、寧ろ自分のやうな貧しい家に、自ら望んで嫁に來ると云ふ志を有難く思つてゐる位であるが、一雄は多くは外へ出勝になる癖が付き出した。

今日も彼は何の志す處もなく、ぶら／＼と、根岸の詫住ひを立ち出で、足の向くまゝ、賑やかな市中へ歩を進めてゐたが、急に何事か思ひ出すやうに、郊外へ散策して見やうと云ふ氣になつて、品川行の電車へ、身を投じた。

一雄は品川の終點から直ちに京濱電車へ乗り移つて、大森で下車して了つた。

黄塵 萬丈の大都會から少かに、足を踏み出した處に、大森と云ふ閑靜な別天地のあることを一雄は知つてゐるが故に郊外と云へば直ちに此大森を思ひ浮べる今日も全く、その靜かなる天地に憧れて



自然に出掛けたのであつた。

一雄は小半日、海濱の愛すべき風光に、悲しく淋しき心を一洗して、やがて、日も傾き始めると、一雄はまた時に歸る鳥のやうに、大森の停車場へ歩を運んだのである。一雄は今度は電車によらず、汽車に運んで貰ふ考へである。

上りの列車を待つ人々の内には、女もあれば男もある。上流の紳士らしきもあれば、また下町の女房らしい婦人もある。老人もある。子供もある。

是等の人々は、殆んど凡てが、大森に一日の清遊をすごして歸へる人達ばかりである。俗悪から逃れて半日なり共清淨を欲した

人々の再び都會へ戻る者らしい。

そして此日一日の歡樂に氣も體も、すつかり思ふ儘に、疲らし

てゐるのである。

若い夫婦らしい男女を見ると、一雄は往年の自分と小夜子とを思ひ出して、そゞろ人生の別離を愁しむのであつた。あゝ何故に小夜子は自分の顔に泥を塗るやうな汚らはしい行ひをしたのであらうか、自分に愛がなかつたのであらうか、否々、別るゝ日まで小夜子は自分を愛してゐ、自分は又小夜子を愛してゐたのであつた。では、何が故に……と心の中で去りし妻の面影を思ひ描いて獨り空想に耽り、問答をしてゐた。

でも、最後に歸着する處は毎常と變つたことがない。それは、自分を助くる健氣なる心から、女狂ひとも云はるゝ高山果村の畫のモデルになつてゐる内に、弱い女の常として、見るもの聞くもの、凡てが、華と美との集つたものである處から、つい、むらゝと虚榮の心の芽が萌え始めて、遂に色を賣り操を破るに至つたものであると。それにしても、あゝ、小夜子は最初は自分を助くるために、浮世の荒浪と闘つたのであつた。が、浪の力は女の力に打ち勝つた。彼女は渦卷の中へ、到々巻き込まれて了つたのであると。

何といふ悲惨な世の中であらう。自分は何の爲に、この酷ひ世

の中に生れて來たのであらう。三年の樂しさ。それは一場の夢に過ぎなかつた。樂しい夢の後には、悲しい現實の世界が巡り來ねばならぬ。その悲しい現實が既に今來てゐるのである。

こうは思つても、ふと、あの感心な春子の姿を思ひ出すと、
「迄の愁眉は忽ち開けて、やがて、一雄の頬のあたりには淋しい微笑さへ仄見えて來るのであつた。」

春子。春子。この淋しい人間を慰めに來てくれる考は世界の中で只一人の春子あるばかりだ。

自分は春子との結婚を今日まで延ばして來たが、母上の心も察して、それを急がねばならぬ。母を慰め、自分を助くる可憐の女

春子との結婚は、これから自分は急速に行ふのだ。

一雄は狭い待合室にぼつねんと腰を掛け乍ら、空想に空想を追ふてゐたが、ふと、傍に立つてゐる二人の紳士の聲が餘り高かつたので、果敢ない夢を破られて了つた。

「何處へ御出でした？」

と一人の五十格好の洋装の男は、口に巻煙草を啣へ乍ら今一人のこれも四十近くの背廣の紳士に尋ねる。

「ぶらく箱根まで出掛けてね、一寸大森へ用足しに下車たんです。貴下は？」

「私は別荘まで……」



と最初の紳士は答へて、一雄とは向ひ合ひの待合ベンチに腰を下ろすと、二番目の男も續いてその傍へ席を占めた。

「どうですか？ 箱根は。」

「今丁度紅葉が盛りですよ。如何です御出掛けになつては。」

「あは、々々。忙中閑ありで近い内に春子でも引つ張つて行きませう。」

「あは、う、う。」

と太い聲で笑ひ合ふ。一雄は春子といふ聲に、ぎよつとした。が考へて見ると、馬鹿々々しい。世の中に、幾百人とも知れぬ春子といふ名を聞いたいけで、慌てるなんぞ。と直ちに氣を替へると又、紳士は相變らず饒舌つてゐる。打ち見る處二人は親しい間柄の友人か、それとも親類の人々らしい様子である。

「時に、近來は御不沙汰ばかりしてゐまして、とんと御伺ひもしませんが、奥さんは依然として御不快ですか。」
と若い方が云ふと、

「いや、どうも、こゝろ長く寝てゐられちや閉口ですよ。」

「それは御困りですね。」
「は、う、う。」

と強いて元氣を見えやうとする。と若い男は再び口を開いて、老紳士を打ち守り乍ら、

「春子さんは、まだ良縁は？……」

とやゝ低い聲で云ふと。老紳士は、愁はしげに、

「どうもあの我儘ではねえ——、ですが、高山さん——貴郎のやうな極めて放任な方にできへ、あの通り辛抱が出来ないと云ふのだから……困り者ですよ。」

「それでもありませんかね。」

と若い紳士も多少同情を表する口調に變る。一雄は此度また驚いた。ふらく動搖してゐる心は、少しでも何物かに觸れると、たちまち跳るのである。

「春子。」「高山。」二つとも近來自分の心を惱ましてゐる人々の名である。その高山といふ男の妻になつて離別したといふ春子の噂が、二人の紳士の口から洩れてゐるのである。けれども自分の妻にならうと云ふ春子は處女だ。

「高山さん、御心配りでもありませんたら、一つ御心配を願ひますよ。」

「承知致しました。自分の先妻を今他人に世話をするといふのは

妙な事ですが、春子さんのやうな教育があれば婿定めは容易なものですよ。偶々私の家のやうな、始終主人が出勝な、不規律な生活の書かきへ来て、おいてきばりにされるやうだと春子さんも、我儘は別としても、面白くないでせうからね。——私に心當りがありますから一つ當つて見ませう。」

「一つ御心配でせうが。それには春子は再縁といふ名でもよろしいから……。」

「いや、其邊は私が心得て居ますから如何にでも。」

一雄は三度驚いた。

自分の知る人の名、高山は書家である。果然、この眼前に控へ

てゐる紳士の高山も、矢張り畫家であつた。

高山と云ふ畫家——一人はよく其名を知つてゐるが一人はあまり知らない。けれども、高山といふ畫師と、その先妻であつたといふ、教育のあるらしい我儘者の春子——考へて見ると、何か其處に一雄の知る春子と高山果村とに關係する處がありはしないか？

一雄の心は、やゝ、騒ぎ始めた。少なくとも平らかではなくなつて來た。疑へばどうでも疑へるものゝ、自分の愛妻ともなる約束のあの春子といふ健氣な少女が、どうして此四十そこゝの紳士の先妻で有り得やう？ えゝいッ。疑ふ自分が如何かしてゐる

んだ。春子は處女で、少しも我儘者ではない。自分は何といふ狂人だらう！ 春子さんに對して今の自分の心を知られたら何んの面目がある、何の申譯が立つかと自分で自分を叱つてゐた。

八 わ な っ き

「春子さん。毎日こうして來て頂いて、色々と御親切に母のことなど御心配かけましてすみませんね。」
と一雄は自分の室に、机に向つたまゝ春子に言葉をかける。と春子は、もう、一雄の妻らしい態度で、

「なんの貴郎！ そんなこと！ 近い内に妾貴郎の妻になるのぢ

やありませんか。いやでございますよ。そんなこと仰有つて下さつちや。」

と一雄を媚びた優しい眼で、一寸睨む真似をする。一雄はもう黙つて了つて、また机の上に積んである一冊の原稿用紙へ眼を落とすと、もう、うんざりして了つて、あゝと嘆息する。と、それを見て春子は慌て、

「あれ、一雄さん。貴郎。何我吐息など御つき遊すの？ またあの小夜子さんのことでも思つてゐらつしやるんぢやなくつて？」と悲しさうな表情をして見せる。

「馬鹿な！ あんな不貞操な女のことなんぞ思やしません。」

と打ち消して、更に語を次ぐ
「私が吐息をつくのは、外のことです。」

と云ふのを、春子は氣にかけて、それを糺そうとする。

「ぢや何故！ その外の事は一體どんなことですか。私はもう近い内に一雄さんと夫婦になるのぢやありませんかそんなにも御隠しなさると



私嫌ですわ。心配があれば二人で心配しますわ。ね、一雄さん。
貴郎。」

と怨むやうに言ふ。

「ぢや申しますがね。一體私は小説家として世に立つて行くことが出来るだらうかと思つて………つい心細くなつたんですよ、はゝゝ。」

と元氣のない顔をして、微笑して見せると、春子は、

「まあ。あんな事を。今になつて何故そんな弱い御心にお成んなさるんでせう。」

「ですがね。私は時々そう思つて情なくなるんですよ。一年以前

から、こうして書きなぐつてゐる大作が、何時になつたら完成することが出来て、それが世に問ふことの出来るやうなものになるだらうかと思ふと………」

と暗然となる。

「大丈夫でございますよ。その内に立派なものが出来ませうから私に出来ることなら何なりとも御手傳ひするのでございませうがね。」

「あはゝゝ、春子さんは教育があるから、少し手傳つて貰ひませうかね。」

「あら。いやでございますわ。教育があるなんて。御口が悪いの

ね一雄さんは。」

と云つて顔を赤くしたが、性質といふものであるか。それとも自ら教育を銜ふといふものであらうか。

「妾に出来ますこと？ 出来ますなら、妾書いて見たいは。」
といふのを聞いた一雄、

「小説を？ 貴女が？」

と少しむつとしたが、氣を變いて、

「やれないこともありませんまい。まあやつて御覽なさい。」
と冷やかに言ふのを眞に受けて春子は、

「そう？ 妾も手傳つて書いていゝこと？」

と子供の親に甘へる口調で、

「でもよしませう。とても一雄さんのやうには書けつこないは。」
としみじみとなる。それでも自分の才を一雄に示さうといふ心が
いくらか仄見える様子をするのである。

「それは、そうと、一雄さん、貴郎、その今書いてゐらつしやる
小説は、小夜子さんがゐらつしやる時からずつと書いてゐらつし
やるんではねえ。」

「そうですよ。もう二年にもなりますからね。小夜子が苦勞した
結晶ですよ。勿論書いたのは私ですけど。」
と云ふと、春子は忌々しそうな表情を現はして、

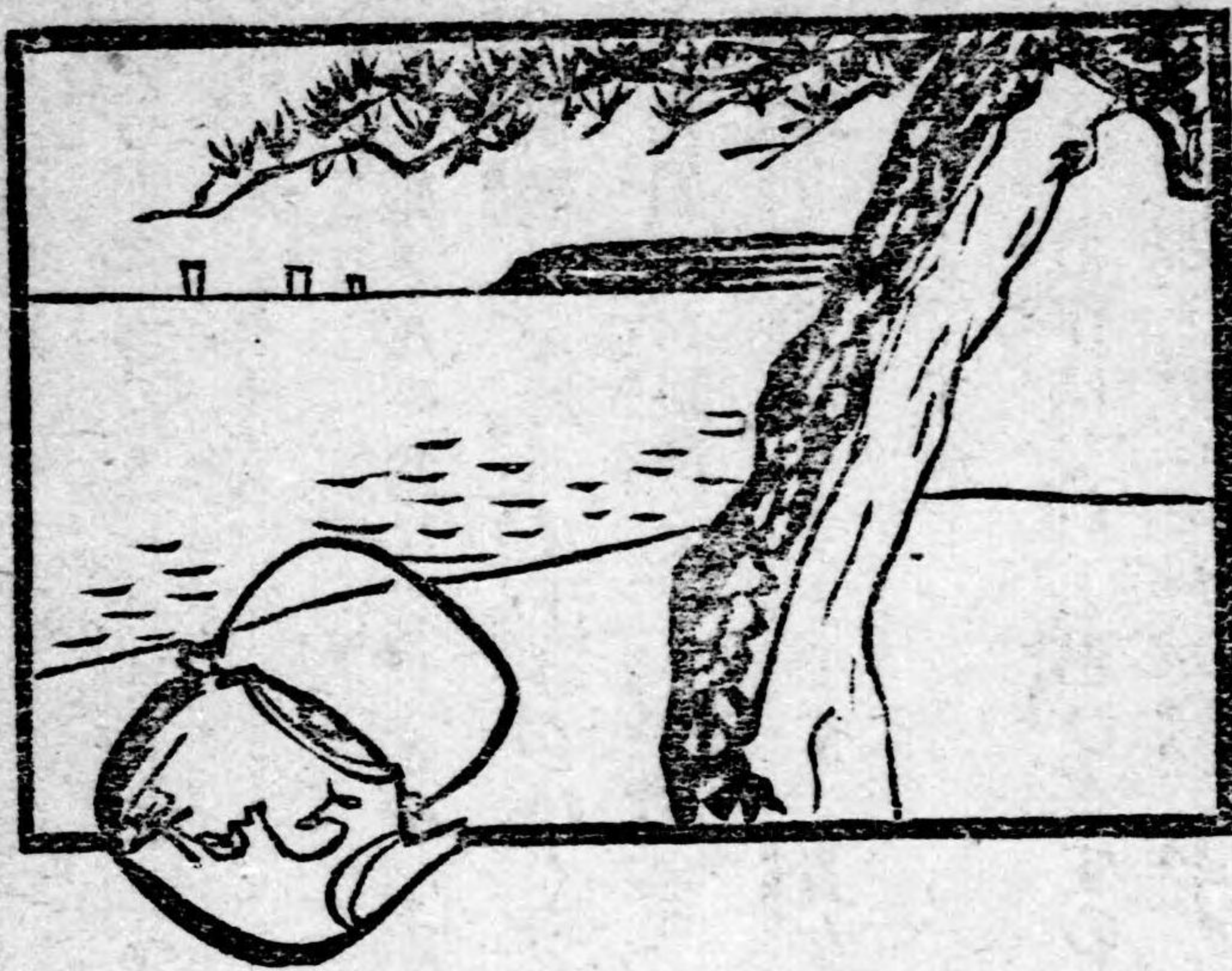
「ですから。その小説を書いてゐらつしやる時は。小夜子さんの事を思ひ出しになりませう。」

「それは思はないこともありません。」

「妾それが悲しいは。折角貴郎と新らしい生活に入らうとするのに、先の妻のことを思ひ出されちや。」

と両手で顔を被ふやうにして。うなだれて了ふのを一雄は眺めて。

「そ、そ、そんなことは断じてありませんよ。小夜子のことと思ひ出しても、もうその間に愛といふものが全く消滅して了つてゐるのですから………」



「でも妾口惜しくつてよ。」

「あは、ゝゝ、小夜子は昔の妻で今は赤の他人。愛もなければ、勿論未練などは少しもありませんよ。」

と春子を慰めてやる。

「そう？ そんなら妾嬉しいけれど。處女つて云ふものはそんなことを心配するものよ！」

「つまらない！」

と笑つて見せる。と、春子はやつと目の光に會つたやうに蘇るのであつた。

「妾一雄さんの爲なら、どんな苦しいことでも辛抱しますから。妾の御願ひを叶へて下さらなくつて？」

とまた媚びた眼付で、一雄方へ。すり寄つて行く。

「有難う。どんなことです。貴女の御願ひと云ふのは、私の方で出来ることですか？」

「え、造作はないと思ひますのよ。」

と例の小説の書きかけの紙に眼を落す。

「云つて御覽なさい。」

「でも一雄さん怒るは。」

「そんな非道いことですか。」

「いゝえ。」

と垂頭れる。

「ぢや、どんな事です、早く云つて下さいよ。」

「ぢや申しますはね。新しい事業を始めますの！」

「今から始めると云つて居るぢやありませんか！」

「どんなことを？」

「凡ての事です。」

「小説も？」

「無識ですとも！」

「では、一雄さん。お願いですから。其今書いていらつしやる小説を妾に下さいな。」

「と云ふのは。貴女が小説の、まだ出来上りもしないものを貰つて如何なさるんですか。」

「焼きますは！」

「えッ。」

と一雄は意外なことを云はれて、一時に驚いて了つた。然しそれも、春子には他意なくして、一雄に小夜子を思ひ出させまいとす

る心から云つたことであると思つて深く怒りもせず、別に意にも介けなかつた。春子は一雄の怒りそうもない顔付を見て、安心したやうに、

「その題の『夢の跡』といふのを捨て、了つて、早く新しい題目の元に、新しい小説をお作りなさいよ。何もまた御考へはありませぬの。」

「まだ何にも考へてゐることがありませんけれども、いづれ、折角ですから、これを書き上げて了つてから、貴女が御手傳ひ下さるなら、一緒に新しい小説を書きませう。」

「えッ。御手傳しますは。」

と嬉しうに云ふが、一雄には、それが如何にも傲慢な今時の女の言葉としきや聞えなくて、返つてそれが爲に、今迄忘れてゐた小夜子の和温しい、優しい、そして女らしい處を思ひ出さずにはゐられなかつた。

さるにても、さるにても。あの柔らかな小夜子が……と又小夜子の心を解し兼ねて、春子には知れず、心に苦しみを覚えるのであつた。

「何か云ひ小説の趣向もと……思つてゐるんですがね。」

「それは屹度、見附かりますは。」

「どうして。」

「あら、さうぢやありませんか。一雄さんは、少し旅行をなさるといふんですけど。少し異つた自然や人事に接近して見ると可いのよ。一度旅行して、旅行でなくつても、戸外へ出て御覽あそばせな。何か不圖したことからいふ考へが湧くかも知れません。海岸はどうでせう。」

「さうですね。海はあまり見たことがありません、屹度いふ處があるでせう。」

「ぢや行きませう。熱海がいゝはね。」

と云つたが一雄が、ふさぎ込んでゐるのに氣がつくと、

「あれ一雄さん。何故黙り込んでゐらつしやるの。」

「何んでもないですよ。」

と云つたが、急に男らしい態度で、

「私は貧乏ですから。到底も今は行けません。それに、若し出掛けるとするれば、母が一人ですから。」

といふのを無造作に打ち消して、

「あら。一雄さん。そんな御心配はなくつてよ。私に出来ることですから。それに、貴郎。お母様には、私共の留守は、生家の下女を、おつけ申しときますから。」

「そんなことを。私が濟みませんよ。」

と云つたが、春子が、機會々々を捉へて、一雄の心を得やうとす

る野心は、遂に一雄の心を動かして了つて、その翌日から、伊豆の旅へと、小栗一雄と、まだ結婚には間のある春子とが上つたのであつた。

春子の父は、巨富を抱いて、何と云ふ定まつた職もなく、病妻を持つたまゝ、春子の行末を案じ乍ら暮してゐる。而も春子と一雄の關係は、春子の口から父の正造に語られて、半ば入嫁の承諾を得てゐるらしい。それでも父の正造は春子の口から一雄の貧困を聞いて、あまり氣のりもしないのである。その正造は巨萬の財産を如何して得たか。或人は、高利貸が彼の前身であつたとも云ふが確かな處は、嘗て一度自分の娘を呉れたことのある高山果村

さへも知らないのである。

正造は近來娘の出勝になつて。自分の生みの母の病床に横つてゐるのに、目もくれず、一雄の家へ、入りびたりとなつてゐるのを少なからず不快に思ふやうになつたのである。春子は成就しつゝある戀にわななく心を押へに押へてゐるのである。

九 疑ひの家

小夜子は、身につく物は悉く賣りつくして了ふ頃は、小栗の家を出てから丁度十日目に當つてゐた。もう何をするをも出来ない。小夜子は假に一間を貸して呉れた品川の、汚ない漁師の家

を、芳子を抱き乍ら、ふらくさまよひ出た。もう食べる資も盡き果てた。どうすることも出来ない。この上は只、飢え死するの外に取る可き方法はない。と、思つたが、流石に子供のことを考へると、さう手を拱ねて、死を待つ愚をも學ぶ譯には行かないので、目的もなく歩るき乍ら、色々と考へたのである。と最後に考へついたのは、芳子を一時何處かへ里子にやるか。情ある人の家へあづけるかして、自分は何處かの工場へ通ふと云ふことであつた。

そしてその内に、自分の潔白であることを、何かの方法でもつて、今一度夫の一雄に通ずるといふことであつたのだ。

それで彼女は、子供を養育して呉れるといふ家の看板を探し探し足にまかせて、歩き歩いた。と、その内に、足は疲れるし腹は減るし。芳子は乳を小夜子の懐に探り求めて飲まうとして、充分に乳が出ないのを泣いて訴へ始めた。小夜子は、情なくなつたり悲しかつたりして、途方に暮れかけやうとしてゐる處へ後ろから女の足音に身を澄すと、その足音は次第に小夜子の方へ近づくので、故意と、途方に暮れて、困り抜いてゐる様子を隠して、何氣ない風を粧ふてゐる内に、女は、小夜子の側を通り過ぎた。

あゝ、餘計な心配をするものだと。其處へ棒のやうになつた足を立ちすくめてゐると通り過ぎた女は、ふと、振り返つた。が、

また歩るき出した、二三步歩るき出して、また振り返つたと今度は、如何にも不審に堪えぬやうな顔色をして、暫くちつと小夜子の方を打ち眺めてゐる。小夜子は、足音が眼の前で、はたと止つたので、慌て、下を向いて、芳子の顔を眺めてゐると、立ち止つた婦人は、何と思つたか、つ



かくと小夜子の身近かく寄つて来て。

「もし。失禮でございますが。貴女は小夜子さんと仰有る方ぢやございませんか。」

と尋ねる聲に、小夜子はぎよつとして。耳たばまで眞紅にし乍ら其婦人を見ると、不意に驚いた風で、

「あッ。奥様！」

と云つたなり。涙を流して、不覺にも淋しい道ばたに、婦人の前で、おろ／＼泣き始めた。

「まあ！小夜子さんでしたか？随分御やつれになりましたはねえ。」

と云つて芳子に眼をつけて、

「おや、お嬢ちゃん。芳ちゃんでしたねえ！」

といつて、初めは、芳子を、あやしてゐたが、遂に両手を差し延べて芳子を、小夜子から引つ奪るやうにして、抱き乍ら。

「まあ、まあ。可愛い、芳ちゃん。この伯父ちゃんは、芳ちゃんには解らないはねえ。この伯母ちゃんは、芳ちゃんのお母あちゃんのお友達よ。ほ／＼と。何んといふ、可愛い嬢ちゃんでせう。あら。伯母ちゃんを見て、にこ／＼笑つてゐますよ。ほ／＼と。」
 といつて小夜子の事は打ち忘れたやうに子供を抱き乍ら夢中になつて喜こんである。小夜子は、こんな身すばらしい風彩をして高

山の奥さんに見つかつたといふ思ひと、それから、小栗の家をモ
デルに雇はれた爲に離縁されてゐるといふことが甚だ酷いので、
芳子を抱き取られたまゝ、もどくしてゐる。穴でもあれば這入
りたいやうな心持であつた。

「小夜子さん。どうなすつたんです。あれから貴女がお遊び御出
になるとばかり信じてゐて、御處も伺ひませんでした。まあ、
大變な御變り様ねえ。」

と同情に満ちくた腫を小夜子に、まぢくと向けると小夜子は
もう身も世もないやうに、心も狂ひ出しさうに煩えるのである。

「奥様！ 私こんな風彩をして、奥様に御目にかゝるのが何より



も苦痛でございますよ。」

と両手で袖を掴み乍ら、顔に
當て、啜り泣くのみである

高山糸子は、いちらしい小
夜子の様子を不思議に思ひ乍
ら、色々と事情を尋ねるので
ある。

「奥様！ 私は小栗の家から
離縁されましたので、ござい
ます。」

「えッ。あの離縁！」

と云つて、糸子は危くも抱えてゐた芳子を取り落そうとして、驚いて、犇々と抱える。

「まあ！ 小夜子さん！ それはあの——眞個なの？」

と反つて疑る位に喫驚したのであるが、小夜子の偽りない姿を見ると、

「貴女のやうな、優しい方が、どうして離別なぞを……」

と云つて、同情を通り越して、そらろ自分の事の様に、涙ぐむのである。

小夜子は、書家の家に雇れて行つたために、そして半身裸體に

なつたために、それを姑に見附かつて、遂に操を疑はれるやうな始末になつたのだとは、糸子の手前どうしても云ひかねたのである。小夜子は、離別の原因を、暫く、何といはうかと思つて迷つた。と、最後に、ふと胸に浮んだことがある。

「奥様、妾、お恥しい事でございますが、操を汚しましたのでございませぬの。」

と云つて、ワツと泣き出した。

「あら、貴方が！ 操を？」

と云つて、小夜子の心を推察して見ると、それはどうしても左様だとは思はれなかつたので、色々と眞個の事情を糺さうと試みた

が、小夜子は罪を自分に歸して了つて、どうしても自分の不貞より起つたことゝ云ふより外に口を閉して云はなかつたのである。お淺から訊いた通り裸體になつたためとか、果村といふ人が女狂であるとか、それが爲に自分が操を疑はれたと云ふことを、當の果村の妻の糸子に、どうして女の口から云ふことが出来やう、もしさう云ふことが、糸子の知る處となつたならば、糸子は憤るに違ひない。憤らないとしても、確かに、氣を悪くすることは火を見るより明らかで、少なくとも糸子は一生懸命になつて、自分の夫が女狂であるといふことを否定して、小夜子の無害を辯解しやうと努むるに違ひない。

糸子といふ恩人に、どうして、そんな世話まで掛けることが出来やう。どうして糸子の夫に女狂の名を着せてゐる話を聞かせることが出来やう。小夜子は女らしい女であつた。離別された後までも、夫の不明や、姑の惨いことを鳴らすやうなことは夢にもなかつたのだ。それで仕方なく、罪を一人で着て了つて、糸子に疑はれ始めたのである。と暫くは、二人とも沈黙を守つてゐたが、通行人の足音に、はつと驚いて、涙を拭き取つてゐる、傍を、若い男女が、笑ひさいめき乍ら通り過ぎやうとして、ふと、其男の顔を窺み見ると、意外



「あれは、私の夫の一雄でございます。」

と云つて、又、絶望に陥つたやうに悲しみ始めるのを、

「あれが——貴女の御良人——あの若い女の方と一緒に？」

と云つて眼を見張つたが、ふと思ひ出したやうに。

「あの女の方は私存じて居ります。存じて居ります。小夜子さ

意外、それは、小夜子の夫の一雄であつた。

「あつッ、一雄さん！」

と呼びかけて、との聲は一雄に聞えたか聞えないか。その聲に驚いたものは、一雄ではなくて、恩人の糸子一人であつた。

「小夜子さん。どつどうなすつたの。」



ん。貴女の離別の原因は解りました！ よく解りました！ 貴女は何といふにいらしい、感心な方でせう。」

「妾も小栗の家に歸へることは出来ないものでせうか。」
といつてぼろ／＼涙を零してゐる。

「私屹度貴女を救つて上げます。」

「いゝえ、どうぞ、そんな事！ 私が悪いのでございますから。」

「いゝえ、私は貴女のやうな方をお助け申さなくつて、世の中に誰を助けませう！」

二人は芳子を抱き乍ら人眼も憚らず確乎と抱き合つた。

10 つ き め 縁

「御免下さい。御免下さい。」

根岸の末の小栗一雄と門口に小さな表札を出した家の影に、今しがた、一人の女が奥へ案内を乞ふ聲がするの、茶の間に、つくねんとして、女中を相手に縫仕事に餘念のないお淺は、慌てゝ潜りの格子戸を内から開けると、外に佇んでゐた女は、

「御免下さい。」

と云つたまゝ、つか／＼這入つて来た。

「何人様でございますか。只今主人が居りませんので。」

とお淺は、見知らぬ女の顔を不思議そうに眺め乍ら、口籠る。と女は、優やかに、一禮して、

「私は高山と申す書師の家内で御座いまして、少し此う様に御話申上げたい事が御座いますので、突然御訪ね申し上げましたので。」

と云つて、おろりとお淺の顔を見ると、お淺は高山といふ書師と聞いて、てつきり此は小夜子と高山の主人とが密通してゐたのを噂ぎ付けた高山の細君が、何か故障を持ち込んで来たものだと思つて、何食はぬ顔で、

「あゝ、左様でございますか。私は主人の母でございます。とん

だ失禮を。でも、今日は主人の
一雄が、一寸留守でござります
から御話を承はりましたも、
と言ひ切らぬ先に、糸子は主人
が居れば、確かに先刻見た一雄
の連れの女があるに違ひないが
主人が居なければ、女もゐない
これは、丁度いゝ具合だと、萬
事を呑み込んだ糸子は左あらぬ
體で、



「いゝ。御主人様は御出にならずとも出来る御話でございますから」

と如何にも上に上り度そうな様子に、お淺も斷り兼ねたと云ふのは、假令小夜子は今離縁の身でも、高山と密通してゐる事が事實である以上は、今まで小栗の家の主婦であつたとして、如何な面倒な事になるかも知れぬと思つたからである。で、お淺は糸子を澁々茶の間へ案内した。女中は、糸子の姿を見ると、驚いてこそく引込んで了つた。

「で御話と申しますのは。」と糸子は口を切つて、小夜子の操の直しいことを述べやうとすると、

「滅相な飛んでもない。小夜子の淫奔は、此姑の私が、ちやんと見て取つたのでございますからね。貴女が何と仰有つても、それは無駄でございますよ。」

と云つて糸子に確かな證據でもあれば、まあ疑ふだけのものだが生きた證據がなくて、只口の先ばかりで、兎も角言はれたとて、信ずることは出来ないとお淺は云ふのである。

で、この調子では到底お淺を説き服することは六ヶ敷しいと思つた糸子は、これは先づ、小夜子を罪に陥入れて離別させた上に散々な憂目に逢はせてゐるのは確にあの高山果村——自分の夫——の先妻であつた春子に相違ないと目星を付けて。先づ、これは

春子の素状から洗つてお淺に聞かせるに如かずと考へて、一段と膝を進めて、

「で、御主人の雄様にはもう後添を御貰ひになつたのでございますか。それともまだ——」

と糸子と言ひ了らぬ先に、お淺は面倒臭いと云はぬ計りに、

「はい。もうちゃんとは相當な者を探して、近い内に家へ来て貰はうと思つて居るのでございますよ。はい。」

「はあそうでございますか。で其御方は或は、根岸の方で春子さんと仰有るんぢやございませんか。」

と出抜かれて、お淺は喫驚したが、すまして、



「え、春子と申しますことは申しますが、……」

と曖昧に逃げやうとする、

「失禮でございますが、其春子さんの御姓は？」

「内田と申します、はい。」

「やつぱり左様でございましたはね。」

と云ふ糸子の言葉に妙な氣になつて、

「しますと。貴女の御友達でもございますか？」

と今度はお淺の方が幾何か不安になつて來るのである。

「私の夫の先妻でございますよ。ほゝゝゝ。」

とお淺が呆れるのを見て、凱歌を擧げるやうに言ふ。

「えッ。何でございますつて？ あの高山さんの先妻だと仰有るんですか？」

「そうでございますよ。そう云ふ關係で高山の家と春子さんの生家とは主人同志、時々用事がありましたして出掛けるのでございます。」

と益々意氣揚々と心の中ではお淺の不明を嗤つてゐる。

「何る程。そうでございましたか。でも只今は高山さんと春子さんとは何の關係もございませんまい。」

とお淺はもう糸子の得意になるのを、ストーンと外して了はうとする。糸子は、左様はさせないとして、

「は、何の關係もございません。何の關係もなくなるのがあの春子さんの性質でございますから。」

と云ふのを聞きとがめて、

「えッ。何と仰有るのでございますか。そう申しますと。」

「あの春子さんは。」

と云つて一寸言ひ淀んでゐると、お淺は急ぎ立てる様に、

「如何したのでございますか。」
と手に汗を握るのである。

「宅の主人の家へ参ります前にも、ちやんと言ひ交した男があつたのでございますよ。」

「えッ！ それを如何して高山さんが御存知で御貫ひになつたので……」

「ほゝゝゝ、主人があんな放任主義の人でございますから。貫ふ時は、うつかりしてゐて、後で忠告する人があるので段々と探つて見ますと、てつきり、左様なのでございますよ。ほゝゝゝ。ですから、先刻さう申しましたのでございますよ。で主人はあんな

構はず屋でございませうから。それとなく春子さんに忠告がましい事を申しますと、反對に怒つて泣いたり、すねたりほゝゝゝ。」

「まあ——あの温順い春子さんが？」

糸子は、此處まで漕きつけて於いて、いゝ時分だと思ふので、口を閉して了つた。只お淺が何か問ふ事がある度に、ちよい／＼と口を出すに止めてゐたが、いゝ折を見て、長座致しましたと云つて、さつさと引上げて了つたのである。

丁度それは一雄と春子とが手を携へてゐたのを、小夜子と二人で目撃した日から物の四五日も立つたほどの頃であつたのだ。

と、其夜、一雄は一人伊豆の旅から歸つて來た。

「春子さんは？」

「歸る途中で、少し用事があるといふので別れました。」

「そうかい。ぢやお出ぢやあるまいね。」

「え、今此處には居ませんよ。」

「そうかい。」

とお淺は一寸安心した様に四邊の様子を見て、春子の家から來てゐる女中で其處に見えないのを幸に、

「一雄や、まあ一寸お前此處へお座り。ね一雄。あの春子さんをお前如何思ひかえ。」

と不意に春子の事を尋ねられて一雄はとぎまぎした。

一 おどろき

「貴母は何と仰有るんです！ 自分であの春子さんを選んで、もう自分勝手に約束をして置き乍ら、今になつて何にも言はず妻にするのは止めろとは、それは——あんまり非道いぢやありませんか、春子さんが、其様ことを聞いたなら恨みますよ。それはお母さん残酷です！」

と無邪氣な一雄は憤然としてお淺に言ひ放つと、お淺も一時は、困じ果てたやうにして黙つて了つたが、暫くして又、

「でもお前少し譯があつて、一時見合せといふ事には出來ないか

え」

「まだお母さん、貴母お解りにならぬのですか、春子さんの方ちやもうすつかり其氣になつて手筈をして居るんだと云ふぢやありませんか。」

「でも少し譯があるんだからねえ。——困つたことになつて了つた」

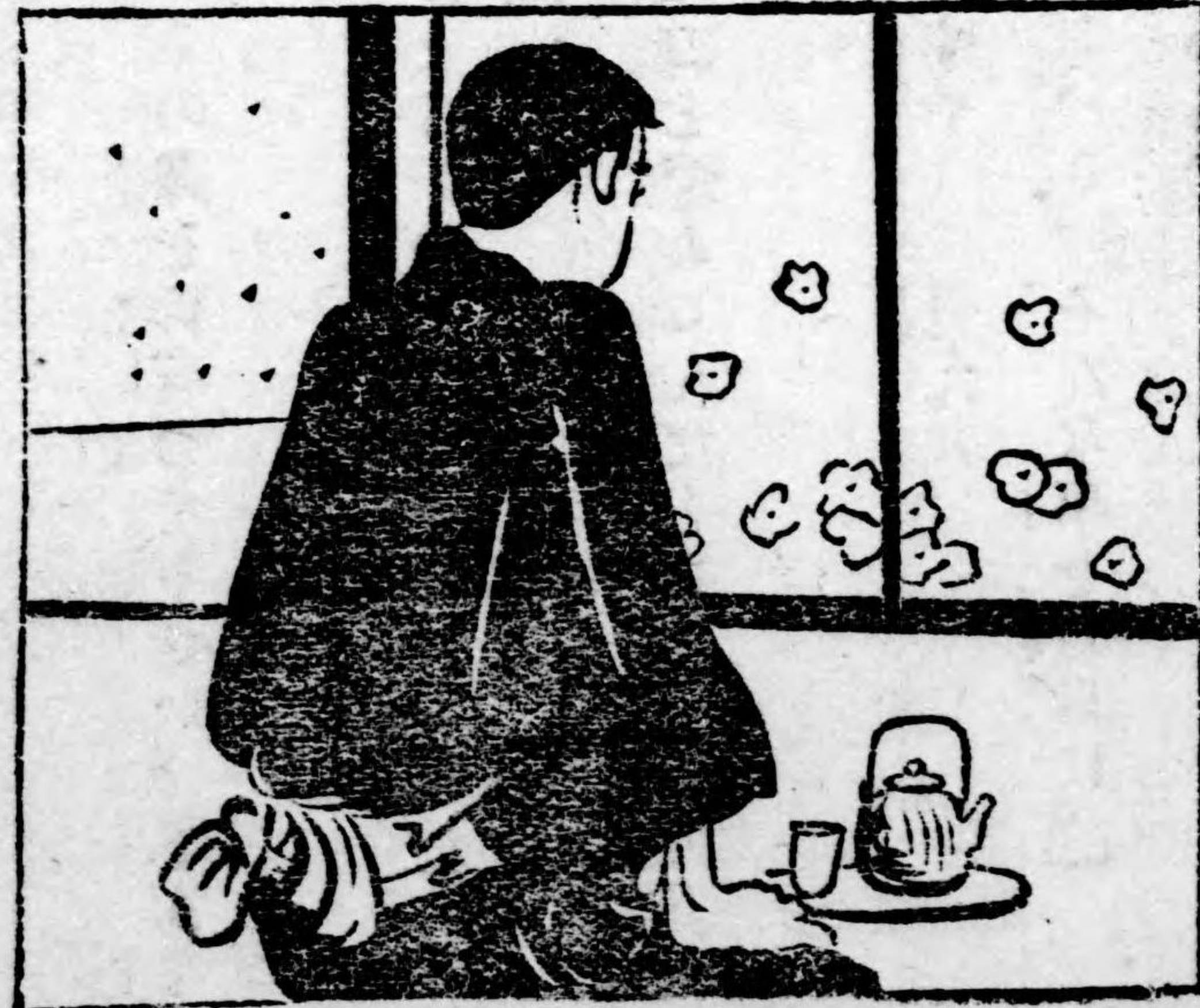
「何です一體その少し譯があると仰有るのは、私には少しも解りませんよ。」

「それはお前には解らないのも尤もだけどね。その譯といふのも實際眞實の事かそれとも、嘘だか未だ確とは行かないのだがね。」

とお淺は如何にも何事か云ひ出さうとして、それが、仲々云ひ憎い様子である。

「何です、馬鹿々々しい。あなたの仰有ることは、何だか夢のやうだ。」

「これが夢なら。——持參金に、春子さんといふ人が手に入るのだがね。」
と吐息するのを、一雄はいく



らか不安に思ひ始めて、

「まあ、それぢや、お母さん、その譯を仰有つて下さい。どんなことだか。」

「ぢや、まあ嘘だと思つて云ひますがね。春子さんはお前。」
と急に一大事といふ表情をし乍ら、

「先に何でも二度亭主を持つたことがあるんだとさ。」
「えッ。」

と一雄は脳がぐらくと亂れ出すやうに覺えた。

「何ですつてお母さん！ 誰だぞ、そ、そんな事を貴母に。」
と口惜しさうにお淺の顔を見詰める、

「何ですぬ！ お前、私をそんな顔をして睨み付けて！」

とお淺は如何にも沈着た態度である。

「高山と書師さね。小夜子が不義をしたといふ高山の家内といふ女の人に来てそう云ふ話をして行きました。」

「何です。あの高山の！ 一體誰に頼まれて、そ、そんな中傷をしに来たんだらう！ 失敬な！」

と拳を固める。糸子が居たら、それこそ、如何な目に逢ふかも知れない程、悲しみ沈んでゐた一雄が、やつと春子に慰めらるゝやうになつたかと思ふ東の間に又もやかやうな話を聞いたから、上氣して夢我になるのも無理はないのである。

「まあ。まく氣を沈着けて御聞きなさいよ。でね。其話はまるで根も葉もないやうだから。取るに足らないとは思つて居ますがね。」
 「……………」
 「ですから、お前に、先刻のやうに、春子さんを如何思ふかと尋ねた譯なんですよ。そんな素振りはありませんかい。」
 「馬鹿な！」

と言つては見るとの、一雄も、例の大森で、一寸耳にしたことがある話を今思ひ出すが、まさか、否々、決してそうではない。春子に限つて其様不貞操な、後暗い事はない。春子は處女だ。而も、五年前に自分に戀をしてゐたが、それを果たさなくつて、今



日まで猶、感心にも、操を守つて獨身で居た處女だ！ あゝ世の中は何故こうまで自分を苦しめるのだらう！ 春子さんに、露その様な素振や口裏でも見せたら。どんなに悲しむであらう。
 あゝ、怖しい人達だ！ 高
 山果村の爲に妻は操を失ふし
 あまつさへ、その人の妻にま

た春子を罪に落されやうとしてゐる。濡衣を着せられやうとしてゐるのであつた！ 一雄はこう思つて、

「それは皆嘘です。お母さん。お安心下さい。春子さんはそんな女ぢやありません！」と叫んだ。

二二 なきわらひ

一雄は一夜悩みに悩んだ。嘘だと信じてはゐても、大森の紳士の立話がどうしても氣にかゝつて仕方がなかつた。其朝はいつもより早く春子が訪ねて来て、愈々明日にでも結婚の式を挙げやうといふことを取り定めた。一雄が平生のやうに生々としてゐない

で、何だか、胸の中に蟠まりを持つてゐるやうに様子に少からず氣を病ましてゐた春子は、

やがて、晝頃になつて、小栗の家に案内を乞ふ人々の氣配に驚いて、茶の間のお淺の後ろへ細くなつてゐると、下女は、一葉の名刺を一雄に通じたのである。



一雄は其一枚の名刺を見ると、其表には「北條成美」としてあるので甚だ不審に思つたが、面會せぬ譯には行かぬので、仕方なく、下女に命じて、自分の部屋へ其人々を通したのである。北條といふ人であらう。快活そうな紳士と、その傍には、意外にも、此家を追放された、やつれ姿の小夜子が芳子を抱き乍ら、これも又意外な例の高山夫人の糸子の後ろから、小さくなつて書齋へ通つて行つた。

と、一雄は小夜子の姿を一目見るより早く、膝を立て、
「小夜子！ お前此家に何しに來た！」
と怒鳴りつけると、小夜子は芳子をあやし乍ら、黙然と頭を垂れ



「まあ、小栗さん！ 少しお待ち下さい！ 私は北條と申します——と云ふのは實は今日此場限りの方便で、實は先日此方に御邪魔をしまして、中傷がましいことを申して歸へりました高山糸子の夫で、高山果村といふ者が私へす。」
「えッ、貴郎があのだ！ 小夜

子を！」

「叱！ 一雄さん！ 貴郎の夫人の小夜子さんと不義をしてゐると中傷された此高山果村は、半月餘り箱根の方へ旅行してゐまして、やつと昨晚宅へ歸つた様な始末では、ゝゝゝゝ。」

「何と仰有るんですか！ それでは旅行してゐたと仰有るんですか！」

「そうです！ 考へて見ると貴君とは大森のステイションで御逢ひ申したことがありませんな！」

「あッ。あの時高山といふ名前はちらと聞いてゐました。そう云へば何處か貴郎に似て居ました處がありました。」

「あはゝゝゝ。」

「では、矢つ張り貴殿でしたか！」

「と一雄は大森ステイションの光景を思ひ出して來た。」

「實は、あの日は箱根から一寸用足しに東京まで出掛けて、すぐ其足で又、箱根へ戻つたんです、で、箱根へ戻らずに、ずつと宅へ歸へれば、今日まで小夜



子さんを苦しめてゐなくてもよかつたんですがねはゝゝゝ。」
 一雄は垂頭れて了つた。そして一語をも發せぬ。
 「證據として、私が箱根から宅の糸子宛へ、送りました約二十枚ばかりの葉書を御目にかけてませう。」
 と云ひ乍ら、洋服のポケットから數枚の繪はがきを取り出して一雄の前へ差し出ると、一雄は、失神した人のやうに、わななく手
 を慄はせ乍ら「失禮」と一言斷つて、其繪葉書を見ると、いづれ
 も、小夜子が小栗の家をあけて、モデルに雇はれてゐる時日の消
 印が明らかに捺されてゐる。
 「しますと、小夜子は何の爲に毎日高山さんの御宅へ上つたので



すか。」
 と一雄は今度はそれが氣にかゝるのである。と、糸子は自分の義侠心を何の誇る處もなく、謙遜な態度で、説いて聞かせて、
 「私が餘計な御世話をしなれば、よかつたと後で宅に叱られましたのですよ。ほゝゝ。」

と何處迄も親切な心を現すのに、一雄は、すつかり酔から醒めた者のやうに暫く瞑目してゐたが、矢庭に、高山の前に兩手をついて、

「感謝します！ 奥様さん御親切有難う！」

と頭を下げてゐたが、

「ほゝゝ御禮には及びませんよ。それよりも早く小夜子さんの無實の罪を……」

と糸子が言ひかけられてゐるのに、一雄は、がばと立ち上つて、小夜子の手を取り乍ら、

「許るしてくれ！ 小夜子さん！ 私は今まで目が眩んでゐたので

つた！ 何卒許るして呉れ！」

と涙を零すのも小夜子は、

「貴郎！ 一雄さん！ お懐し

うございます！」

と芳子を揺り乍ら、嬉しなみだに暮れるのであつた。

一雄は今度は再び高山夫婦に

向つて、温順く、

「とんだ失禮いたしました、何卒御許るし下さい。萬事は私の



「不明から起つた事です！」

「何に、詫まらなくつてもいゝですよ。私はどうでもいゝけれども小夜子さんが可愛相でね。」

と小夜子の方を振り返ると、糸子は、

「小栗さん、小夜子さんのやうに心の清い女は今時ありませんよ私に向つても、離別の原因を自分が悪く／＼と思つて仰有るんですからね。それは／＼随分苦勞をなさつたのですからねえ。」

と同情する、と小夜子は、涙を拭き乍ら、

「貴郎、高山の奥さんは妾を眞個の妹のやうにして下さるんですの。」

と云つた。が、間もなくそれは、糸子の笑ひ聲に、打ち消されて了ふ。と、一雄の書齋に急に笑ひ聲が起るのを不少不思議に思つてゐた茶の間の春子は、足音を忍ばせて、中の様子を隙見にくると、其處には、悉く自分の敵が、一雄と打ち解けてゐるのに「アッ」と叫んで倒れやうとするのを高山に発見されて、

「やあ、春子さん。女狂ひの高山が出ましたせ。はゝゝゝ、まあそんな處から覗かなくなつて此方へ御這入んなすつたらどうです。」

と冷笑すると、春子はクワツと怒つた。

「何です？ 私は貴女のやうな人は存じませんよ！」

「あは、三月の間私の家内の役を勤めてゐた貴女としてはちと忘れが早過ぎますね。」

「失敬な！」

「いゝ加減貴女も假面を外してお了ひなさいよ。家には重病人もある癖に！」

と叱りつけるやうに云つた。と、其處へ茶の間から、お淺が面目なげに出て来て、べつたり座り乍ら、

「小夜子や、お母さんが悪かつたから何卒勘忍しておくれ。すまなかつた。すまなかつた。」

と小夜子の前に頭を下げやうとするのを、慌て、止めた小夜子



は、

「もつたいないお義母さま。」

これから何卒氣をつけますから、一雄さんのお側に置かせて下さいまし。」

「今度は母さんの私からお頼みするから、何卒一雄を見捨ないでねえ。」

「有難う、嬉しうございますは。お義母さん。」

と云つてお淺の手をしかと握るのである。お淺も老眼に露の玉を宿してゐた。

「お、芳坊々々。」

とお淺は急に芳子を小夜子の膝から奪ふやうに引取る。高山は葉巻を燻らして此光景を眺めてゐたが、ふと氣がつくと、傍で、春子が凄い眼差をし乍ら高山を睨みつけてゐるのに、ムツとして、

「何をまだ愚圖々々してゐるんです。早く御歸へりなさい！」

「餘計な御世話です！」

「貴女の御父さんから貴女の嫁入りを頼まれてゐるが、貴女のやうな女には、婿を探してやるより、偽されてゐる人々から貴女を

追放する方が餘つ程功德になる！」

此時、春子は、もう心が顛倒しかけてゐた。目が眩んで足元も定かに見えずなつてゐた。が高山の此言葉を聞くともう堪え切れなくなる。と、今まで眞赤だつた顔が見る間に蒼くなると、其處へドーンと倒れて了つた。

「まあお可哀そうに。早く何とかして……………」

と小夜子が立つて春子を抱き起さうとしたが、春子の體は、もう冷めなくなつてゐたのである。

小夜子は一雄と再び夫婦になることが出来た。そして小説「夢の跡」は世に出て、盛んに高評されるにつれて家計は自分に豊になつて小夜子は次男の一郎を擧げた。蘇生した春子は一生獨身で暮らすと云つてゐる。高山夫婦は、月に二三度は一雄夫婦の家へ遊びに来る。

品川で小夜子親子の難を救つた老人が死んだとき、其葬儀の費用はすべて一雄の家から出たのである。

女の心終

大正六年五月三十日印刷
大正六年六月三日發行

〔定價十七錢〕

不許
複製

著者 磯 千 鳥

東京市淺草區茅町一丁目十二番地

發行者 菅 谷 與 吉

東京市淺草區左衛門町一番地

印刷者 柴 田 清 之 助

東京市淺草區茅町一丁目十二番地

發行所

日吉堂本店

電話下谷六五四二番
振替東京二五二六七番

告廣刊既說小鎖連

【作 鳥 千 磯】

第五編	第四編	第三編	第二編	第一編
愛の力	女の心	嵐のあと	夏子	二人静子
鬼の如き夫婦のため、一人の可憐なる少女が、あらゆる困難に打ち勝つ物語で、其間に、戀あり情あり愛ある變化極りなき悲劇。	虚榮に燃ゆる女と、青年小説家と其妻と悲境に沈めるため、起る悲劇で、書家の妻の侠心によつて、危く自殺を免かれて再び世の中に出る物語。	伯父の強硬に苦しむ青年と、伯父の娘と、娘の兄の友人兄妹が、世の辛酸を嘗め乍ら出世し、青年は礦脈を發見して盲目となり、戀人に逢ふ。	伯父の強硬に苦しむ青年と、伯父の娘と、娘の兄の友人兄妹が、世の辛酸を嘗め乍ら出世し、青年は礦脈を發見して盲目となり、戀人に逢ふ。	金の光に迷ひし義母のために、相許るしてゐた女との戀に破れた青年を描けるもので、波瀾重疊の悲劇である。
錢四各稅郵 錢七拾各價定				

178
1019

終

